

海外漁業協力



Lineup

[パラオ共和国大統領との面談](#)

[モロッコ出張報告 \(ATLAFCO\)](#)

[プロジェクト報告 \(パプアニューギニア\)](#)

[研修実施報告](#)

[着任報告 \(フィジー駐在員事務所\)](#)

[新人職員紹介](#)

[彼の地のイッピン・スリランカ編](#)

03
2025

奄美大島の南端に瀬戸内漁業協同組合がある。一年を通して黒潮があたり、キハダやメバチが釣れる他、伝統の追い込み漁、イセエビの素潜り漁が行われている。地元で人気があり、よく消費されるのはシビ（キハダ）とイラブチ（ブダイ）である。地元の魚屋の話ではこの二種類の魚の刺身があれば概ね奄美の人は満足するとのことだった。

瀬戸内漁業協同組合のセリは午前6時に始まり、基本的には前日に水揚げされた魚が並ぶ。訪れた日は熱帯低気圧の影響をうけて漁は少なかったが、スジアラ、ナンヨウブダイ、イロブダイ、イシガキフグ、ヨコシマクロダイ等、いかにも南国風の魚が水揚げされセリにかけられていた。まぐろ類は、主に相対取引（売り手と買い手が数量や価格について個別に交渉し販売する方法）により流通しており、水揚げ後すぐに鹿児島方面に送られることが多い。北部の名瀬から出港する鹿児島行き最終フェリー（18時）に間に合わせるため、多くのまぐろ漁船は14時から16時の間に帰港する。

奄美大島へはキハダとメバチの活魚及び鮮魚の写真を撮影する目的で出張した。海外漁業協力財団は現在、インド洋まぐろ類委員会とのプロジェクトの一環でキハダとメバチの判別ガイドを動画やWEBサイトの形で作成しており、それらに用いる写真が必要だからである（本プロジェクトの詳細は本誌109号P.18を参照）。

写真撮影は水産研究・教育機構と瀬戸内漁協の協力を得て行っている。活魚のキハダとメバチの写真は、瀬戸内漁協所属の一本釣り船の上で撮影した。乗船した一本釣り船は水産研究・教育機構が飼育実験のために備船しており、釣れたまぐろの一部は極力手で触れず、餌を活かしている魚槽に移していた。そして漁が終わった後は、水産研究・教育機構が所有する加計呂麻島にある大型の飼育実験用のいけすにまぐろが移されていった。ここでキハダとメバチそれぞれの成長速度を調べる研究が行われるとのことである。



一本釣りの開始。この日はミズンや小型のゲルクマがまぐろを寄せるために撒かれていた。



セリ前の魚の計量



瀬戸内漁業協同組合のセリの様子。その道50年の女性仲買人が4-5名いらっしゃる。



漁獲されたスジアラ

目次

世界の魚市場

日本（奄美大島）瀬戸内漁業協同組合（専門家 藤野 忠敬）

財団トピックス

2 スランゲル・ウィップス パラオ共和国大統領との面談（事業部長 安久 誠司）

4 ATLAFCO合同委員会第16回会合を終えて（モロッコ訪問記）（融資部長 市野 孝典）

プロジェクト報告

12 パプアニューギニアの水産加工プロジェクト（専門家 新井 孝彦）

17 2024年度パプアニューギニア冷凍機講習会実施報告（専門家 村上 正治）

研修実施報告

21 漁船員養成（乗船）コース研修実施報告（交流促進課 荒谷 俊大）

任国便り

25 フィジー事務所着任のご挨拶（フィジー駐在員事務所事務所 濱田 莉穂）

新人職員紹介

27 これまでの経歴とこれからの抱負（開発協力課 角谷 祐介）

彼の地のイッピン

33 彼の地のイッピン・スリランカ編（開発協力課 角谷 祐介）

主な動き

38 要人往来、研修生受入、専門家派遣（短期派遣・長期派遣）

政府ベースの漁業協力等

42 無償資金協力、調査団の派遣、漁業交渉・国際会議

44 編集後記

表紙の写真：キハダ・メバチ・カツオの水揚げ（日本・奄美大島）。

この漁船は日帰り操業が基本であり、撮影をしたこの日は大漁であった。

スランゲル・ウィップス パラオ共和国大統領との面談

事業部長 安久 誠司

2025年2月13日、白須理事長が、駐日パラオ国大使館のご厚意により訪日中のウィップス大統領と面談する機会を得た。パラオ共和国（以下「パラオ」という。）は我が国と長年にわたり交流してきた友好国であり、漁業分野においても我が国かつお・まぐろ業界にとって重要な国である。今回、海外漁業協力財団（以下「財団」という。）は、ウィップス大統領、ビクトル漁業・農業・環境大臣らと面談する機会を得て、漁業分野におけるパラオと財団の友好関係を更に深めることができた。概略は以下のとおり。

1. 日 時： 2025年2月13日（木） 09:45～10:30
2. 場 所： ザ・オークラ東京 大統領宿泊室内の会議室
3. 出席者： パラオ共和国

スランゲル・S・ウィップス・ジュニア	パラオ共和国大統領
グスタフ・アイタロー	国務大臣
スティーブン・ビクトル	漁業・農業・環境大臣
ピーター・レメディ・アデルバイ	駐日パラオ特命全権大使

海外漁業協力財団

白須理事長、太田専務理事、安久事業部長、和久調査役、島田課員
農林水産省および水産庁
花房農林水産省顧問、大南水産庁国際課係長

4. 概 要：

ウィップス大統領、アイタロー大臣、ビクトル大臣、アデルバイ大使は、大統領宿泊室内の会議室にて、白須理事長ら財団関係者等を迎えられた。面談は9時45分頃に開始した。

まずは白須理事長から、ウィップス大統領が二期目の大統領に就任されたことへのお祝いを、アイタロー大臣、ビクトル大臣、アデルバイ大使には、財団協力事業に対する理解・支援に対する感謝を表明した。続いて、財団は研修生の受入れ、水産関連施設の修理修復プロジェクト、シャコガイ養殖振興プロジェクト、持続的利用アドバイザー派遣事業など、パラオとの50年間にわたる技術協力を通じ、パラオの沿岸漁業振興に貢献してきたと述べた。加えて大統領の今般の訪日の成功、今後のご活躍、我が国漁船のパラオ水域への安定入漁、日本とパラオの友好関係の発展を祈念すると述べた。

これを受けて、ウィップス大統領は、財団の50年にわたる協力活動はパラオの漁業分野に大きな影響を与



大統領との面談

えていること、特に養殖分野に大きく貢献しており、今後も支援の継続を願いたいと述べられた。

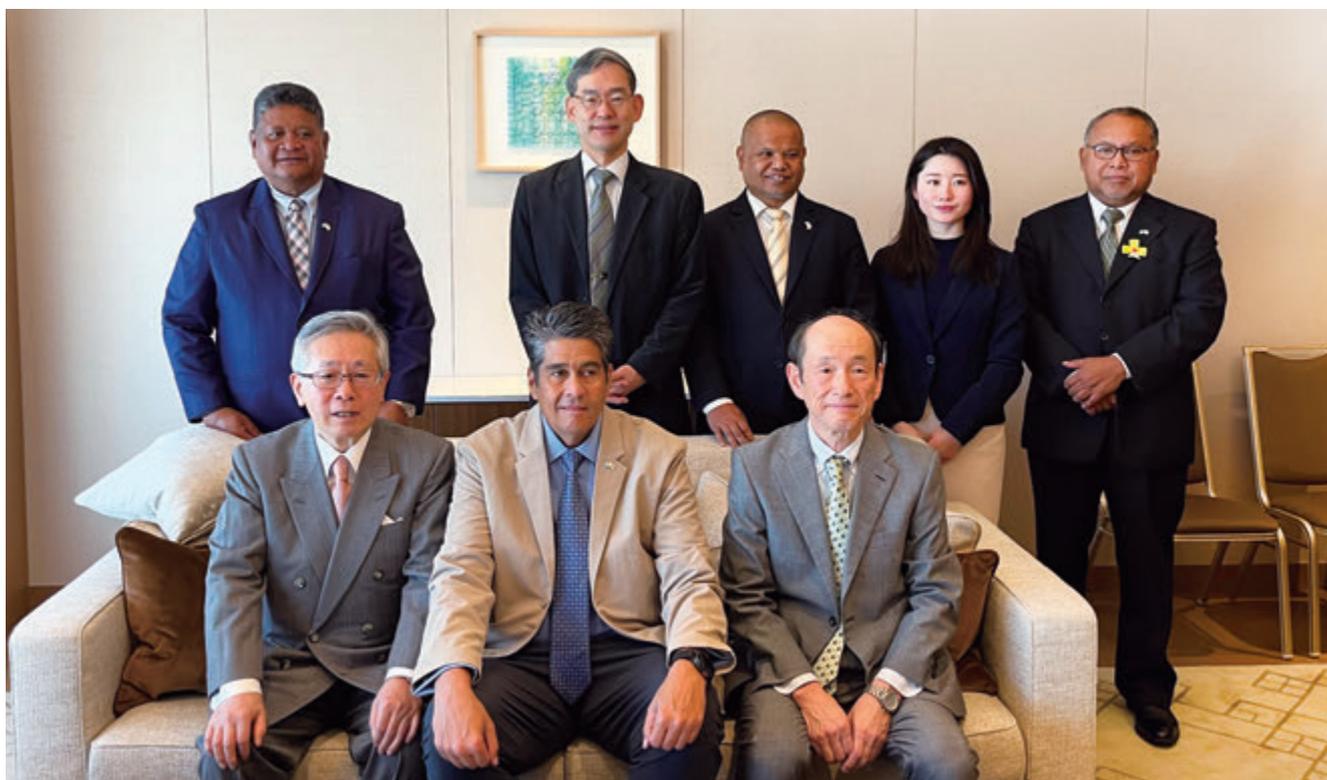
パラオの資源を最適な形で有効利用し、沿岸漁業、養殖、沖合を含む海洋資源の有効利用が重要と述べ、パラオ排他的経済水域の30%を閉鎖（保護）し、残りを解放することにより、日本の漁業者だけでなくパラオ漁業者にとっても良い影響を与えるのでこれが実現するよう努力すると話された。

さらに、パラオの水産業振興のためウィップス大統領が希望されているガッパン港の整備に関しては、JICAが早期に進めるよう後押しを依頼された。白須理事長は整備の主体はJICAであり、ご要望については水産庁を經由し外務省及びJICAに伝えると返答した。

その後、ビクトル大臣から、これまでの財団からの支援に感謝が述べられた。また、シャコガイ種苗を生産しているPMDC（パラオ海洋養殖普及センター）への専門家の長期派遣、ガッパン港整備のコーディネーター業務を現在財団からパラオに派遣されているアドバイザーが担当すること、一本釣り漁船BOFI丸に漁労長を派遣し、操業と乗船員への訓練をすることの3点が要請された。

最後に白須理事長から、財団はパラオとの友好協力関係を継続することを基本方針としており、今後も財団事業についてご理解・ご支援を賜りたいと述べたところ、大統領は「継続」と「拡大」の2つのキーワードにしたいと述べられ、会談を終えた。その後、関係者で記念写真を撮影した。

会談は終始、和やかな、友好的な雰囲気の中で進み、今後もパラオと財団の友好協力関係が継続・発展することが期待できるものであった。



前列左から、白須理事長、ウィップス大統領、花房顧問

後列左から、アイタロー大臣、太田専務理事、ビクトル大臣、大南係長、アデルバイ大使

ATLAFCO 合同委員会第 16 回会合を終えて（モロッコ訪問記）

融資部長 市野 孝典

1. はじめに

海外漁業協力財団（以下「財団」という。）は、2009年より大西洋沿岸アフリカ諸国漁業協力閣僚会議（The Ministerial Conference on Fisheries Cooperation among African States Bordering the Atlantic Ocean：以下「ATLAFCO」という。）に対して経済協力を実施している。ATLAFCOは、漁業資源の乱獲が著しく進んだ大西洋沿岸のアフリカ諸国が、資源管理と漁業開発の両立を目指し、1989年に設立した国際機関であり、事務局が所在するモロッコ王国（以下「モロッコ」という。）を含め22か国が加盟している。

ATLAFCOは、財団の経済協力を基にプロモーションファンド（以下「PF」という。）を設置し、これを活用して加盟国と連携しながら各種事業を展開している。

PFは「水産資源の持続的利用に係る我が国とATLAFCO加盟国の互恵的協力関係の強化を通じ、双方の利益の実現を図ること」を目的とし、①自国水産業発展のための能力強化、②漁業を管理するための能力強化、③地域漁業機関の管理措置を含む国際的な義務の実施に係る事業を主な用途としている。

また、財団は、水産物の持続的利用に関する助言、PFの資金管理及びATLAFCO事務局との緊密な連携のため石川淳司専門家（以下「石川アドバイザー」という。）を派遣し、事務局

と協同しPFの運営に係る様々な支援・協力を行っている。

PFの管理・運営については、ATLAFCO事務局及び財団のほか、ATLAFCO加盟国から選出される議長国及び書記国、ATLAFCO事務局が所在するビューロー国のモロッコを構成メンバーとして合同委員会を設置し、主に①プロジェクト実施報告及び決算、②プロジェクト実施計画及び予算の検証・検討・決議、③協議が必要とされる事項の調整のため、少なくとも年1回の会合を実施することとしている。

2024年12月に前述の合同委員会の第16回会合がモロッコ北部の内陸都市フェズで2日にわたり開催され、筆者が財団を代表して出席した。

以下に第16回会合の概要のほか、世界的脅威となった新型コロナウイルス感染症（以下「COVID-19」という。）から脱したモロッコの様子及び現地で見聞したことを紹介する。



モロッコ地図（外務省ホームページから引用加工）

i アンゴラ、カメルーン、カーボベルデ、ガボン、ガンビア、ガーナ、ギニア、ギニアビサウ、コンゴ、コートジボワール、サイール、サントメ・プリンシペ、シエラレオネ、セネガル、赤道ギニア、トーゴ、ナミビア、ナイジェリア、ベナン、モロッコ、モーリタニア、リベリア（国名は全て通称）。

1. モロッコ（ラバト）到着

日本から約17時間の搭乗を経て、ATLAFCO事務局の所在地であるモロッコの首都ラバトに到着した。モロッコと日本の時差はマイナス8時間のため、移動で消耗した時間を取り戻して少々得をした気分になる方もいるかもしれない。

ラバトは大西洋に面したブー・レグレグ川の河口に位置し、モロッコの行政機関が集中している。川の対岸にはラバトの空の玄関口の一つであるラバト＝サレ空港があるサレという町があり、川を挟んで南北に位置するラバトとサレは双子の都市として発展を続けている。

紀元前にはラバトに人々が定住していたと言われており、現在は近代的な建造物と歴史的価値の高い遺跡が混在し、新市街と旧市街が隣接している。2012年には「近代都市と歴史的都市が共存する首都」の名称でUNESCOの世界遺産（文化遺産）に登録された。



ムハンマド6世タワー
2018年に着工されたサレにある高さ250m(55階建て)のモロッコで最も高いビル。

到着は日曜日の午後であり、翌日にATLAFCO事務局での打合せや今次会合の開催場所であるモロッコ北東フェズへの陸路移動を控えていたため、日没までの数時間でラバトの旧市街周辺を駆け足で見学した。

まず初めに、旧市街の市場を抜けてラバト東部から北部へ流れるブー・レグレグ川の東岸に立地するシェラ遺跡に向けて徒歩で移動した。

旧市街の通りは、老若男女を問わずとにかく大勢の人々が行き交っており、東京で例えば築地場外市場、上野アメ横商店街、巣鴨地藏通商店街、原宿竹下通りをモザイクのように組み合わせたとような印象であった。



シェラ遺跡
1世紀頃の古代ローマ時代と13世紀末頃のマリーン朝時代の遺跡が混在している。

COVID-19が沈静化したこともあり、各国からの観光客も多く見受けられるのではないかと想像していたが、意外にも行き交う人々のほとんどは近隣に居住するモロッコ人と思しき家族や友人同士であった。日常の買い物やお茶を飲みながら一息ついている様子が多く見かけられ、思いがけず「街角で活気に満ちながらも、穏やかな暮らしを送るモロッコの人々」の空気を感じることができた。



旧市街のアーケード通り
地元住民でひしめき合っている。

2. ATLAFCO事務局訪問とフェズへの陸路移動

ラバト到着後の翌日、ATLAFCO事務局を訪問した。筆者は初めての訪問であったが、敷地内の手入れの行き届いた植栽や芝生の緑と建物の白い壁のコントラストが美しく端正な佇まいに感嘆した。

ATLAFCO事務局では、2024年1月に事務局長に就任したTaoufik EL KTIRI氏（以下「クティリ事務局長」という。）との翌日から始まる今次会合の打合せに加え、同氏からスタッフ皆さんの紹介と担当業務の説明、事務所施設内の案内を頂いた。クティリ事務局長とは2024年6月に日本で開催された水棲生物資源の持続的利用会合のため来日された時以来の再会となった。

事務局との打合せでは、財団から今回の合同委員会会合準備への尽力に加え、石川アドバイザーとの連携・協同について謝意を述べた。クティリ事務局長からは事務局が中心となり参加準備を進め、まさに準備の山場を迎えていた「水産サロン」の企画内容や進捗状況などについて説明を頂いた。



ATLAFCO 事務局との打合せの様子

この水産サロンは隔年で開催される水産分野の国際見本市のようなもので、2025年2月にモロッコ王室後援によりモロッコ南西部アガディールで実施されるとのことであった。今回のテーマは「持続可能な漁業と養殖業：包括的で効率的なブルーエコノミーへの梠（てこ）」

となっている。ATLAFCO事務局は、20か国以上の加盟国と協同で展示・プレゼンテーション用のブースを設置し、加盟国で取り組まれている各種事業をモロッコ国内外に広く紹介することで、一層のATLAFCOのプレゼンスの向上を図りたいと語った。

クティリ事務局長の同イベントにかける熱意をヒシヒシと感ずることもさることながら、ブース設営などの業者を公募で選定したことやイベントスペース貸与費などの経費を利用可能な制度を活用して低コスト化を図ることで、業者選定の公正性、費用の妥当性と透明性の確保の徹底に強い意志を感じた。この記事が掲載された本誌が発刊されるころには、この水産サロンが成功裏に終わっているだろう。



ATLAFCO 事務局前の庭で。
右から6人目がクティリ事務局長、4人目が筆者。

ATLAFCO事務局訪問の後、同日午後には会合の開催地であるフェズへ陸路で移動した。

ラバトからフェズまでの約230kmのほとんどを高速道路で移動した。高速道路は走行に何ら心配を感じないほど整備が行き届いており、途中、サービスエリアのような休憩施設も設けられていた。恐らく、日本のような激しい渋滞が発生しないと思われ、同日も見込んでいた2時間30分程度で新市街に位置する合同委員会会場のホテル「Barceló Fès Medina」へ到着した。

フェズの旧市街は1981年にUNESCOの世界遺産（文化遺産）に登録されており、「世界最大の迷宮都市」と称され、9,000以上の路地が存在する複雑な街並みとなっている。この旧市街はモロッコの有名な観光資源であるが、新市街に位置するBarceló Fès Medinaの周辺は、かなりの築年数ではあるものの、至って一般的な建築物が立ち並んでいた。日常生活に必要な物はほとんど手にはいるだろうと思えるほどの物量を有した巨大なスーパーマーケット（フランス資本のカルフル）や衣料品店、ファーストフード店などのテナントが入ったショッピングモールも存在している。フェズもラバトと同様に生活圏として開発された「新市街」と観光資源として保存されている「旧市街」が共存していた。

3. ATLAFCOプロモーションファンド第16回 会合（合同委員会）

今回の出席者は、クティリ事務局長を筆頭にATLAFCO事務局スタッフ（事務局長を含め5名）、現在ATLAFCO議長国を務めるコートジボワール共和国（以下「コートジボワール」という。）代表（1名）、ビューロー国のモロッコ代表（1名）であった。日本側は、水産庁職員（1名）、財団職員等（仏語通訳者1名を含む3名）、財団がATLAFCOに派遣している石川アドバイザーの総勢12名となった。本来、書記国であるガンビア共和国も参加を予定していたが、モロッコ入国に必要な査証の許可取得の日数不足等から止むを得ず欠席となったため、ATLAFCO事務局がフォローすることとなった。

また、議長国のコートジボワールからは、当初Sidi Tiémoko TOURÉ動物・水産資源大臣の参加が予定されていたが、国内の止むを得ない事情により急遽欠席となり、同大臣の代理が参加するとともに会合参加者へビデオメッセージが届けられた。

【TOURÉ大臣のビデオメッセージ概要】

- ①日本そして財団は長年にわたるATLAFCOのパートナーであり、その支援を受け、我々政府間国際組織の基本的な位置付け、そして加盟国間の漁業協力強化の原動力としての役割は近年益々強まり、持続可能な開発、食の安全、経済・環境協力を重点を置いている。
- ②ATLAFCOの今後の年間行動計画では、加盟国の漁業コミュニティの人的・社会的発展に貢献する革新的プロジェクトを含み、気候変動の必然性と影響を考慮しつつ漁業ガバナンスと科学研究面の管理能力を強化するプロジェクトを特定する必要がある。
- ③ATLAFCOとアフリカ大陸への継続的な財政支援という日本政府と財団の支援に対し、私そして全加盟国から改めて感謝の意を表したい。

また、クティリ事務局長とATLAFCO事務局スタッフの積極性、継続的コミットメント、献身と我々組織のための日々の努力に、改めて敬意を表明する。



合同委員会の様子
画面は TOURÉ 大臣のビデオレター

会合は、ATLAFCO事務局、議長国のコートジボワール代表、ビューロー国のモロッコ代表、財団等の全参加者で議題が採択された後、事務局長により議題に沿って進行された。

開催に際し、クティリ事務局長のリーダーシップの下、ATLAFCO事務局により事前に2024年活動実績の取りまとめや事業見込額の精査、2025年活動計画（案）の策定および事業計

画額の推計・設定が行われていた。また、財団は、石川アドバイザーを介して情報提供を受け、ATLAFCO事務局と財団の双方で事業内容の確認や予算の取り扱いなどに対する認識と見解の共有が成されていた。このことで一部の事業予算用途の変更及び再配分、目的に応じた事業計画書の分割などはあったものの、特に見解の相違や紛糾することがなく会合が終結した。この背景には、クティリ事務局長をはじめとするATLAFCO事務局スタッフの真摯かつ誠実な取り組み、石川アドバイザーの多大な支援があったことは明白であり、深く感謝を申し上げたい。

クティリ事務局長は就任以後初めての会合であったが、同氏が常に議長国、ビューロー国の意見を丁寧に汲み上げ、関係者間で淀み、曇りのないコンセンサスを形成するための十分なコミュニケーションを取る姿勢を保っていることが強く印象に残った。ATLAFCO事務局への訪問の際にクティリ事務局長の発言から特に印象に残っていた、①コミュニケーションの重要性、②透明性・公平性の確保の2点を改めて認識することとなった。

ATLAFCO加盟国は22か国あり、各国が抱える個別の事情を踏まえた調整や要望の集約などに対し、事務局長として大局的な視点に基づき対応していくことは並々ならぬ苦勞が伴うものと考えられる。クティリ事務局長のリーダーシップ、ATLAFCO事務局スタッフの連携、議長国及びビューロー国の理解と協力を通じて、加盟国及び我が国や財団が2025年の活動から成果を得られ、さらに、関係者間の友好的な連携強化は着実に前進することを確信する。

4. フェズの旧市街

モロッコは古代から幾重もの歴史が刻まれ今日に至っており、700年代後半にはフェズが首都とされていた。旧市街の広さは約2.2キロメートル×1.2キロメートルであり、「古い

フェズ」を意味するフェズ・エル・バリ (Fez el Bali) とも呼ばれている。歴史的に幾度も侵略に晒されてきたモロッコの都市は、ラバトでも見られるように周囲は強固な城壁（シェラ遺跡等）が構築され、内部はフェズの旧市街のように複雑な構造で形成されてきた。

合同委員会の2日目を終了した午後から日没までの数時間を利用してフェズの旧市街を見学した。

会場のホテルからは旧市街までは車で30分ほどの距離にあり、途中で旧市街を見渡せる丘から全景を眺めた後、旧市街に足を踏み入れた。



丘から見たフェズ旧市街の遠景

ATLAFCO事務局により現地ガイドの手配をいただき、石川アドバイザーを含む日本人メンバーだけで散策したが、「世界最大の迷宮都市」と形容されることが全く誇張でも偽りでもなく、歩き始めて数十メートルで「大迷宮」を実感した。現地ガイドの存在がなければ元の場所に戻ることはほぼ不可能と思えるほど複雑に路地が入り組み、さらに路地なのか、それとも建物の通路なのか判別がつかない路地と思しき通路が重層的に絡み合い街全体を構築している。旧市街内を1週間程度じっくりとさまよい歩いたとしても、自分の現在地を臆げに把握することで精一杯だろう。初めての訪問では現在位置を瞬く間に見失い、直前のルートすら正確にトレースすることは困難であろう。

この旧市街は有名な観光地でもあることから、海外からの訪問者を意識して整備された、いわゆる京都祇園の花見小路のような街並みを想像していた。しかし、実際は観光地としての整備された様子は見受けられず、数世代にわたり住み続けている「ファーシー」と呼ばれる地元住民が路地に溢れ返り、さらに車の通行が出来ないために多種多様の荷物を運搬する手押し車が入り乱れ、喧噪と混沌が渾然一体となっていった。事前の想像とは違い、人々がただただ当たり前の日常を過ごそうと懸命に生きる「飾り気のない細やかな幸福を求める人々の生活」が息づいている印象を受けた。

街が発する強烈な熱気に抗いながら周りに目を配ると、路地の両側には食料品店、魚屋、工芸品店、カフェ、雑貨店、電気製品店などの間口の狭い商店が路地の隙間へねじ込むように軒を連ねていた。



旧市街の路地にあった魚屋と荷物を運ぶ手押し車

フェズの旧市街には、綿織物、羊毛製品、銅製品、なめし皮などの工房があり、100以上の手工芸が営まれていると言われている。16世紀前から続くと言われている皮なめし工房で独特なおいの中、職人たちが羊などの皮を染色していく様子や店の傍ら手作業で工芸品の製作に勤しむ多くの職人の姿を見学できた。その一方で、街の中を常に手放せないもののようにスマートフォンを片手に行き交う人々が見られ、歴史と文化、伝統とイノベーションがない交ぜ

られた類まれな異空間を体感する貴重な経験となった。



巨大なパレットを広げたような皮なめし工房「タンネリ」

5.モロッコ料理

モロッコ料理は、建国の歴史のおよび地理的背景の影響を少なからず受け、地中海料理、ベルベル料理、アンダルシア料理、中世アラブ料理が元となっており、2010年にUNESCO無形文化遺産に登録された。モロッコ料理で有名なものとして世界最小のパスタと言われているククスやタジン鍋（円錐形や半円ドーム状の蓋の土鍋）で調理された蒸し料理を思い浮かべられる方も多いと思う。

訪問したラバトやフェズにおいては、レストランの看板を掲げているお店であれば、肉、魚、野菜、スープなどのメニューは豊富にあり、特に肉料理は牛肉、羊肉、鶏肉から選ぶことができ、日常的に種類を問わずよく食されている様子がうかがえた。調理にはサフランやクミンなどの香辛料が多く使われており、モロッコ料理の特徴を一層引き立てている。

食事の際には「アツァイ」と呼ばれる砂糖とミントを加えた緑茶がほぼ必ず供される。このお茶には、日本の茶道と同じく少々複雑な作法があるようだが、作法に囚われずにどこでも気軽に楽しまれている。一日に何度も飲む習慣が根付いており、また、蒸らす時間を変えて嗜む文化もあり、以下のような格言もあるほどである。

【アツァイを嗜む格言】

一番煎じは苦いこと人生の如く、二番煎じは強いこと愛の如し。三番煎じは死の如く穏やかである。



羊肉のクスクス



ハリラスープ。右側には、甘いシロップでコーティングされた揚げ菓子が添えられていた。スープの味については、本誌106号「彼の地のイッピン・モロッコ編」を一読いただきたい。

また、モロッコでは料理とともに供されるワインも国内で多く製造されており、街中の酒店でも気軽に手に入れることが出来る。ブドウ栽培の歴史は深く、古代ローマ時代にエジプトやバビロニアの狭間に住んでいたフェニキア人によりもたらされたと言われている。モロッコワインは、赤ワイン、ロゼ、ヴァン・グリが生産量の90%以上を占め、白ワインの生産量は僅か数%である。ワインは、原産地保証委員会 (Appellation d'Origine Contrôlée) により品質

が保証された主に14の地域で生産されている。



モロッコ産のワイン

6. さいごに

合同委員会では、クティリ事務局長およびATLAFCOスタッフが一丸となって緻密な準備と開催に尽力される姿勢、さらに参加者へのきめ細やかな配慮に深く感銘を受けた。COVID-19の世界的な蔓延により、2020年および2021年の会合はオンラインでの開催となったが、会合を円滑に実施し、有益な結果に繋げ、目的に沿った将来の方向性を明確に定めるためには、人と人が膝を突き合わせ、双方がリスベクトの念を持ち、呼吸と熱量を感じながら率直な意見を交わすことが非常に重要であると改めて深く感じた。

クティリ事務局長をはじめ、スタッフの皆さんのご尽力と温かなおもてなしについて感謝を述べた際、先方の「自分たちが持っているものを分かち合うことはモロッコの文化」という言葉とともに、「モロッコと日本は歴史と文化を尊重し大切にしながらも、新しいものを取り入れ、革新を求める点で非常に似ている」という言葉が大変印象的であった。

総じてATLAFCOの皆さんは日本に対して好意的な印象を持たれている様子がうかがえた。そこで、改めて日本に抱くイメージを尋ねたところ、①規律やルールの重視と順守、②礼儀正しく親切で誠実、③勤勉さをもって目覚ましい

発展を遂げたなど、聞けば聞くほど少々気恥ずかしい思いを抱く一方で、改めて「襟を直し、禪を締め直す」決意をした。

「おもてなし」は、茶人の千利休が残した利休七則を手本として「無駄を省くため相手の気持ちを考えること、本質を見極めたうえで相手を想いやること、備えを怠らずゆとりをもって気を配ること」を基本とされていることもあり、日本の「専売特許」と考えているところがあった。しかしながら、今回の会合を通して、世界の国や地域に限らず、おもてなしは友好・信頼関係の構築と醸成には欠かせないものだと痛感し、おもてなしを契機に心で繋がる確たる友好関係、互惠関係を築くためにも、常に尊敬と思いやりを基本に、真摯に誠実な姿勢を貫くことが信頼に繋がるのではないかと考えを巡らせている。

最後にクティリ事務局長ならびに ATLAFCO スタッフの皆さんの日々の弛まぬ尽力、議長国コートジボワール、ビューロー国モロッコ、ATLAFCO加盟国の皆様のご支援・ご協力、ATLAFCO事務局と常に連携し広角的・多角的視野で協力・支援を担う石川アドバイザー、さらには第16回会合を含め日本側関係者のモロッコ滞在中、息つく暇もなく ATLAFCO 側メンバーとの齟齬の無いコミュニケーションを担っていただいた藤岡通訳、全ての関係の皆様に深く感謝を申し上げます。



左から、Mr. Abdelkrim MRABTI ATLAFCO 事務局 情報管理担当、
Mr. Mohammed HADDAD ATLAFCO 事務局 財務責任者、松岡専門職、
Ms. Hayat ASSARA ATLAFCO 事務局 局長補佐、竹田水産庁海外漁業協力室長、市野融資部長、
Mr. Taoufik El KTIRI ATLAFCO 事務局長、
Mr. Yao Brou FERNAND コートジボワール動物・水産資源省 魚類生物多様性保全プロジェクト担当
Mr. Abdennaji LAAMRICH ATLAFCO 事務局 協力・情報システム部長
Mr. Abdelali LOUDRHIRI モロッコ 海洋漁業部協力局員

パプアニューギニアの水産加工プロジェクト

専門家 新井 孝彦

1. はじめに

もう、何十年も前のことであるが、私は民間会社において、「いつかは、協力隊（青年海外協力隊：以下「協力隊」という。）に参加したいな」と、機会をうかがいながら働いていた。会社は居心地が非常に良かったが、就職して数年過ぎた頃から、協力隊の募集要項に目を通すようになった。

当時、パプアニューギニア独立国（以下「PNG」という。）からも隊員の募集があり、その時はじめて、PNGという国の存在を意識した。

結局、私は違う国の隊員となったが、その時のPNG隊員募集に応じた方は、今でも、海外漁業協力財団（以下「財団」という。）に在籍しており、後年、私のはじめて財団で関わった仕事の担当者である。

子供の頃から持っていた「アフリカに行ってみたい。南の島に行ってみたい。」という漠然とした思いが、専門家として財団で働き始めてから現実となっている。一度はそこで働くことさえ考えていたPNGにもいつか行くことになるだろうとは考えていた。2年前に「PNGにおける沿岸地域水産物有効利用プロジェクト」（以下「有効利用プロジェクト」という。）の仕事の打診をされた時には、「やはり来た」と思ったものである。

2. PNGという国

(1) 地理

PNGは赤道直下の南太平洋に位置し、日本の約1.25倍の面積を持ち、1,000万人の人口のうち多くはメラネシア系の人々である。首都は、

ニューギニア島の南東部にある国内最大都市のポートモレスビーである。国内では800以上の言語が話されているが、公用語の1つは英語であり、イギリス国王を国家元首とするイギリス連邦の一員である。



パプアニューギニア地図

(2) 歴史

16世紀、ポルトガル人とスペイン人が、現在のPNGがあるニューギニア島に至り、前者が本島に「パプア」、後者が北部の島々に「ニューギニア」と命名した。19世紀の植民地時代、ニューギニア島を東西に分割し、西側をオランダが統治し、さらに東側を南北に分けた各地域をドイツ、イギリス（後にオーストラリア）が統治していた。20世紀になり、第一次世界大戦にドイツが敗北すると、ドイツ領であった地域はオーストラリアの委任統治領となった。

第二次世界大戦中の1942年1月、日本軍がニューブリテン島ラバウルに上陸、周辺の島や本島の北岸を占領した。8月には本島北部海岸から山越えて首都ポートモレスビーを攻略する作戦が実行されたが失敗した。

ニューギニア戦線で日本軍は20万人以上が戦いに参加し、そのうち生還した者は2万名のみであったと言われている。連合軍の戦死者も1万人以上であった。また、PNG現地人の犠牲者は5万人とも推定されている。

戦後、東側の南北に分割されていた地域は統合されパプアニューギニア地域となり、オーストラリアに統治されていたが、1975年、「Independent State of Papua New Guinea」として独立した。

(3) マヌス島

水産物有効利用プロジェクトの活動を行っているマヌス島の面積は新潟県佐渡島の約2倍の広さを持ち、ジャングルに覆われており、標高700mの山岳地帯がある。約3万人が住み、北東部のロレンガウがマヌス州の州都である。

空港からロレンガウまでの道と、そこから島の中央部までをつなぐ未舗装路のみが車が通れる道であり、西側半分には車は入れない。西側の住民たちの交通手段は船外機付きボートであり、ロレンガウから島の西端まで行くのには8時間かかる。

(4) 日本との関係

日本は、PNGが独立した1975年に外交関係を樹立した。

日本からの輸入額は307億円、日本への輸出額は4,486億円（2023年財務省貿易統計）で、2022年の駐在日本企業は14社であった。

在留邦人は116名、在日PNG人は80名（いずれも2023年時点）であった。1979年から、JICA青年海外協力隊が派遣されている。

日本の遠洋まぐろ延縄漁船や大型まき網船などがPNGの200海里内で数多く操業し、周年を通してカツオやマグロなどを漁獲しており、日本にとって非常に重要な水域である。

3. プロジェクト概要

(1) 背景

財団は、2017-2020年度、PNGで水産庁委託事業の「地域水産物新規流通発掘調査事業」を実施し、水産物の加工・流通に関する知見をPNG水産公社（以下「NFA」という。）に提供した。

NFAは、それに基づき、2021年からの水産物の加工・流通分野での事業計画を作成し、財団へ水産物の付加価値化に関する技術協力を要請した。そして、水産庁の補助事業の一環として「水産物有効利用開発事業」が実施されることとなった。

(2) 目的

製造方法が簡単かつ常温で長期保存可能な加工品の開発・製造方法改良、現地の人々への製造技術移転、実証的な販路の調査、NFAへの知見提供・提案がプロジェクトの目的である。

(3) 場所

マヌス州水産海洋資源局（以下「DFMR」という。）所管のロレンガウ漁業センターとマヌス中央市場で活動を行った。

(4) 担当

財団側は、水産加工専門家の野村明氏、PNGの海洋水産資源持続的利用アドバイザーで現地コーディネーターの五十嵐誠氏、総合コーディネーターの新井孝彦（筆者）が担当する。

PNG側は、NFA、DFMR、国立水産訓練校（以下「NFC」という。）が担当組織である。

(5) 活動

筆者が2023年度、プロジェクトに参加してからの活動内容は、「加工品の製造法改良」、「試験販売」、「技術移転」、「NFAへの知見提供と提案」である。

4. 活動詳細

2023年度以降の活動は以下のとおり。

(1) 加工品開発と販売試験

加工品の開発に際して、以下の条件を満たす必要があった。

- ① 簡便な製造法
- ② 常温流通可能
- ③ 現地の資機材で製造可能
- ④ 現地の人々の嗜好に合う
- ⑤ 現地の人々が容易に購入できる販売価格

①～④については、2022年度までに野村専門家、五十嵐アドバイザーらがいくつかの水産加工品を試作し、試験販売をして検討した結果、「真空包装の燻製魚」と「南蛮漬」の2種類が選定されていた。

2023、2024年度は主に⑤の条件を満たすため、これらの加工品について、製造コストを減らす方法を検討した。

ア. 「真空包装の燻製魚」

ソウダガツオ類やスマを丸ごと煮て、頭、内臓、骨をはずした肉部（鯉節の形状で、それより小さい）をココナッツ殻の煙でいぶした後、調味液とともに真空包装した加工品である。

野村専門家の知見と工夫によって、レトルト装置を使用せずに、1年以上、常温でも変質しないものが作れるようになった。

製造コストを減らす工夫を種々試みたが、輸入品である真空包装用の袋が高いので、マヌスで多く売れるような価格にすることはできなかった。そのためか、マヌス中央市場での試験販売では全く売れなかったが、首都の日本食レストランに依頼した試験販売では、用意したものが全て完売する良い結果が出た。



マヌス中央市場で原料魚を購入。



真空包装された燻製魚

イ. 「南蛮漬け」

イワシに似たミズンという小魚を丸ごと、またはコーラルフィッシュの切り身に、小麦粉をまぶして揚げ、地元産レモンの果汁、醤油、砂糖を混合した調味液で味付けした加工品である。砂糖（ジャムと同じ原理の防腐効果）とレモン果汁（酸の防腐効果）により、常温でも長持ちする。

販売単価が真空包装の燻製魚より格段に安いので、マヌスでも消費者に受け入れられた。

さらに、製造コストのなかで大きな割合を占める調味液を再使用（再使用が可能かどうか、調味液の品質について各種測定器具で科学的に調査済み）することによって、販売価格をさらに安くすることに成功した。その後のマヌス中央市場の試験販売では、1時間足らずで110尾が飛ぶように売れた。



ミズンの南蛮漬け

(2) 技術移転研修

2023年の8月と11月、マヌスを訪問した際には、それまでに技術を習得したDFMRのカウンターパートであるペカイ氏が中心となって、数名の職員と一緒に加工品を作り、実習という形で加工品製造研修を行った。

2024年には、マヌス島と周辺の各島から一般の人達が研修に参加するようになった。2月には8名、8月には19名、11月には13名に加工品の製造方法を教えている。また、これまで2回、NFCの講師も研修に参加している。



研修生の出身地

2024年8月の研修の際、財団としては、2月の研修参加者のうち数人に再度の参加を呼び掛けたつもりであった。しかし、初日に、ロレンガウ漁業センターの加工場に行ってみると、19名もの婦人達が待っていて驚いた。しかし、前述のペカイ氏が上手に参加者をまとめ、指導し、

傍観者になる人はおらず、作業を譲り合って楽しく研修ができた。しかしながら、さすがに多すぎるので、11月の研修は、人数を減らして13人で実施した。



魚をカットする研修生

毎回、研修の中でマヌス中央市場での試食会や試験販売を行うことが恒例となっている。研修生が積極的に準備、客の呼び込み、商品説明、販売等を行うので、我々、財団の出番はほぼない。

最後に研修生から研修満足度のアンケートをとっているが、「また参加したい」や「自分の島でも教えたい」といったコメントが多かった。



2024年の試験販売の様子（左側が研修生）

5. 展開

NFCは、自校で加工研修を実施しているが、これは「缶詰工場等の作業員養成」という内容

で、食品製造工場で働くにあたっての心構えや常識、水産の基礎知識等を指導している。実際に水産加工品製造方法を指導するというものではない。

現在、財団は、マヌスで実際に加工品を製造し、その方法を現地住民に指導しており、NFCもこのような内容の研修の実施を強く希望している。しかし、NFCは加工実習を行う施設を持っておらず、この問題を解決しない限り、NFCの願いは達成されない。

そこで、財団は、NFCやDFMRの敷地内に多数放置されている SHIPPING コンテナを利用して加工室を作ることを上部組織のNFAに提案した。地面に基礎を築いてその上にコンクリートで建物を建てる加工室と比べ、内装工事のみの SHIPPING コンテナ式なら、格段に建設費は安くなる。

「NFAや地方政府が各地に SHIPPING コンテナ式加工室を設置する。この加工室の設置場所にNFC講師が出張して研修を行う。地元の漁師が獲ってきた魚を原料にして、技術を身につけた者が加工品を製造し、市場で販売し、収入を得る。」というサイクルを生むことが目標である。財団が2012年にエクアドルで行った「漁業開発のための施設改善プロジェクト」ではこれが実現しているので、決して机上の空論ではない。



SHIPPING コンテナ

6. おわりに

巡り巡ってPNGのプロジェクトを担当することになった。

カウンターパートはじめ関係者にも恵まれ、プロジェクトは順調に推移している。プロジェクト実施地のマヌスの人々は明るく、穏やかで、我々の技術指導にも一生懸命応えてくれる。

日本でのマヌス島の知名度は低いと思うが、ここは日本から遠いただの南の島ではない。太平洋戦争の激戦地であり、「1944年2月、米軍がマヌス島の日本軍基地を攻撃、3,830名の日本兵は同年3月に玉砕。生き残った将兵は、山岳地帯で抵抗を続けたが、5月には通信が途絶えた」という史実があった。「5月には通信が途絶えた」という部分について現地の人に尋ねると、一部の将兵は生き残って確かに帰国したと親から聞いたと返答があった。それを聞いて、少し心が軽くなった。

かつて日本と深い関係のあったこの島に、日本人が再び入り活動しているのは、何かの縁だろうか。ぜひ、このプロジェクトを成功させて、マヌスの発展に貢献したい。



DFMR 前の海で出漁準備をする人と波乗りをする子供達 (奥)

2024年度 パプアニューギニア冷凍機講習会実施報告

専門家 村上 正治

1. はじめに

筆者は自動車メーカーが運営する整備士育成学校の教育部職員として18年間教鞭を執ったのち、2020年9月より海外漁業協力財団（以下「財団」という。）で太平洋島嶼国において地域巡回機能・回復等推進事業ⁱ (Fisheries Development Assistance for Pacific Islands Nations：以下「FDAPIN」という。)の漁船（機関）専門家として働きはじめた。現在は、主にアフリカ関係国の水産技術普及推進事業、太平洋島嶼国及びアフリカ地域の地域巡回・拠点機能回復等推進事業の業務を行っている。専門分野は自動車のハイブリッドシステムやエンジンシステム、電気自動車等の電気系統、エアコンディショナーシステム及び冷凍機である。本年度はパプアニューギニア独立国（以下「PNG」という。）にて、FDAPIN事業の一環として2019年度を最後に中断していた冷凍機講習会を担当することとなった。



パプアニューギニア地図

ⁱ 財団が実施する協力事業の1つ。太平洋島嶼国の水産施設等の修理・修復及びそのための技術移転を実施する技術協力事業。

2. PNG及び国立水産訓練校について

PNGはオーストラリアの北に位置し、ニューギニア島の東半分と600の島からなる国である。面積は約46万km²と日本の約1.25倍であり、人口は約1,000万人（2022年）である。主要産業は液化天然ガス等の鉱業、パーム油やコーヒーの農業及び林業で、国際通貨基金（IMF）が発表した2023年の一人当たりの名目GDP推定値は2,525米ドルであり191か国中142位と、いわゆる開発途上国の一つである。現地語は800以上あり世界の言語の約12%が集中しており、公用語はピジン語、英語、モツ語で、ほとんどの国民が英語を話すことができる。国立水産訓練校（以下「NFC」という。）は、首都ポートモレスビーから北に約860km離れた離島ニューアイランド州ケビアンにある。ここには、FDAPINで供与された日本製のプレート型製氷機2機（日産250kg、日産700kg）とブロック型製氷機（日産250kg）の3機が設置されている。それらの製氷機は大洋州で多く採用されているものと同じ型であり、講習を実施するために適した施設である。



NFC校舎

3. 冷凍機講習会概要

冷凍機講習会は、新型コロナウイルス感染症が流行する以前、2017年度から2019年度にかけてNFCで実施されていた。FDAPINでは製氷機及び冷凍機の技術向上のため長年OJT（On the Job Training）を中心とした技術指導が行われているが、同施設においては、前述した実機やシミュレーターを使用して構造や制御を学ぶことができるとともに、現場で稼働している機器では行いにくいメンテナンス作業の反復練習やトラブルシューティングを行うことができる。PNGには財団より支援された製氷機が国内約10か所の水産施設に設置されており、PNG側は同施設のオペレーターのトレーニングに重点を置いていることから、製氷機に関する教育を財団に要請した。

今回の受講生は、アロタウやココボなど国内の製氷施設のオペレーターなど9名とNFC職員3名で、講習は2024年10月14日から25日の10日間実施され、財団の近澤専門家に授業運営のサポートとして協力を頂いた。



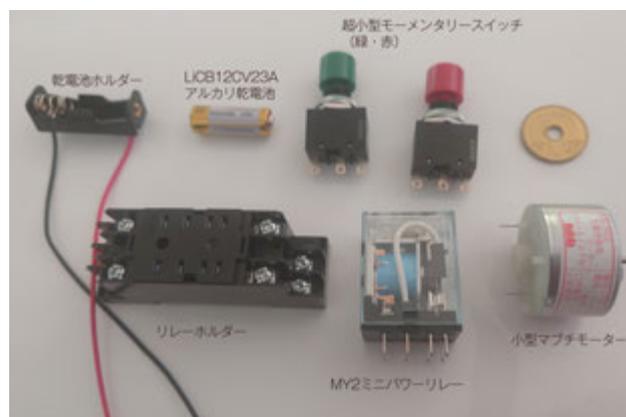
受講生たち

4. 講習内容

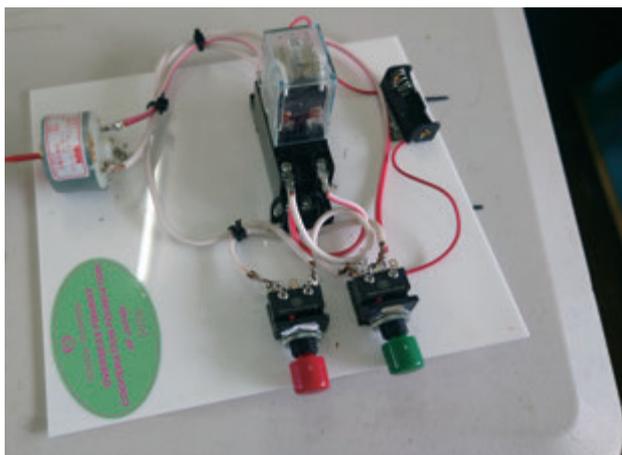
5年ぶりに再開される講習についてNFCのカウンターパートと協議した結果、基本的な講習内容は2019年度に実施されたものを踏襲し、一部変更を加えることとなった。項目としては、冷凍装置の基礎理論、冷凍サイクル（冷媒の状

態変化・温度変化をコントロールして持続的な冷却を行う仕組み）の理解、製氷機内部構成部品の理解、製氷機の制御、製氷機の定期メンテナンス実施のポイント、冷媒補給法と冷凍機油交換法の訓練、冷媒配管加工訓練、三相交流の基礎及び三相交流電動機の起動回路の作成であり、本年度は、製氷機の起動回路を模した電気工作やスマートフォンアプリケーションによるモバイルラーニングを加えることとした。

電気工作については、起動回路製作後に受講者が自身の施設に持ち帰って同僚等に横展開ができるようコンパクトに設計した。160mm×180mmの亚克力板に全ての部品を取り付けることができるよう、LiCB12V23Aアルカリ乾電池を使用し、超小型モーメンタリースイッチや小型マブチモーター、製氷機でもよく利用されるMY2ミニパワーリレーで製氷機の自己保持型起動回路を再現した。部品を一つずつ配布するタイミングで部品の構造や作動を教え、こちらも配布したサーキットテスターで点検を行っていく。最終的には、配線図情報のみで配線接続を行うことができるようになり、実際に動く電気工作を自身の力で完成させることで受講生の満足度は高く、同時にサーキットテスターや配線の圧着端子の使い方も学ばせることができた。



使用した部品



完成した起動回路

次に冷凍サイクルの理解のため、モバイルラーニングを実施した。デジタルディバイド問題ⁱⁱについては事前調査時に確認を行ったところ、PNGでのスマートフォン所持率が高く、通信環境にも問題はなかったことから実施を行うことを決定した。冷凍サイクルに関する動画を視聴させた後、筆者自身で作成したスマートフォンアプリで練習問題を実施させ、理解度向上を狙った。なお、モバイルラーニングの効果について検証を行うため、前後にテストを実施し、どの程度理解度が向上するのか検証を行った。その結果、事前試験時の4.0ポイント（最大10ポイント）から事後試験時の6.1ポイント（最大10ポイント）へと2.1ポイント、52.5%の向上が見られた。しかしながら、標準偏差は事前試験の2.3から事後試験では3.3となった。これは受講者の成績により大きなばらつきが出ていることを示しているため、統計学的検定を行った。その結果、モバイルラーニングは成績上昇に影響を及ぼすことが分かった。

さらに、今後の活用のため受講者に対してアンケート調査を実施した。アンケート内容は、

①学歴・②経験年数・③基礎知識レベル・④知

ii 情報格差。情報通信技術（IT）（特にインターネット）の恩恵を受けることのできる人とできない人の間に生じる経済格差を指す。

識面の向上・⑤興味意欲の向上・⑥自己教育力の向上・⑦構造理解レベル・⑧非認知能力を測る内容を設定した。アンケート結果を重回帰分析したところ、学歴や経験年数、知識や構造理解の自己認識レベルと実際の成績に有意な差があるとは言えないことがわかった。また、基礎知識の理解に関しては学歴や経験年数等は関係なく、知識面の向上の実感のみが大きく寄与することが分かった。



スマートフォンアプリで練習問題を解く受講生

製氷機の冷媒補充や冷凍機油交換実習では、カウンターパートを中心に授業が実施できるように準備を行った。カウンターパートは2019年度まで行っていた講習会で経験を積んでおり、十分に実施できることを確認することができた。銅管補修実習については、受講生が修理に従事する技術者ではなく、オペレーターということもあり、エポキシ樹脂系接着剤による緊急時の一時的な補修法の指導を行った。

多くの項目において、彼らには多少レベルの高い受講内容であったが、全員が精力的に課題に取り組んでいるのが印象的であり、受講生の満足度は高かった。全日程終了時にはNFCの講堂にて終講式が行われ、受講者に講習修了証を授与した。

5. 2025年度の冷凍機講習会の予定について

2024年10月にフィジーで行われた太平洋島嶼国漁業局長会議では、2025年度の冷凍機講習会について概要説明があり、FDAPIN関係国の冷凍設備技術者をNFCに受け入れ、講習を実施する計画が発表された。NFC側は海外からの受講生の受け入れも歓迎しており、現在の宿舎にエアコンを取り付けるなどリノベーションし、環境を改善していくことを表明した。講習会が開催されれば、今年度の講義内容をブラッシュアップし講習をさらに充実させたい。

6. さいごに

NFCの施設は充実しており、冷凍機講習会を実施するには最適な場所であることが再認識できた。NFCの教場はとても清潔で校内にはゴミの散乱もなく、プロジェクターやWi-Fi環境も整っていた。実習施設にはプレート型製氷

機2機及びブロック型製氷機が設置されているが、どちらも丁寧にメンテナンスされており正常に稼働していた。カウンターパートも製氷機のメンテナンス等に関する知識・技術を十分に有していると共に非常に協力的であった。NFCの校長及び学部長も非常に好意的で、他の大洋州地域からも受講生を呼び冷凍機講習会を広く進めていきたいと話していた。NFCの好意的な対応は、財団が長期に渡り良好な関係を築いている証拠であり、継続の力を感じた。今後も相互の信頼関係を醸成し、日本の水産分野に対する友好的な関係のさらなる深化に寄与できるよう業務に邁進したい。



修了証を手にした受講生たち（筆者は左から5番目）

漁船員養成（乗船）コース研修実施報告

交流促進課 荒谷 俊大

1. はじめに

海外漁業協力財団（以下「財団」という。）では、我が国と漁業で関係の深い沿岸国（以下「関係沿岸国」という。）の人材育成のニーズに応えるため、長きにわたり様々な研修コースを開設し、研修生を我が国に受け入れている。

本稿では、2024年度に実施した漁船員養成（乗船）コース（以下「乗船コース」という。）を紹介する。

2. 漁船員養成（乗船）コース

(1) 概要

乗船コースは、一般社団法人海外まき網漁業協会（以下「海まき協会」という。）からの申請に基づき実施している研修コースである。関係沿岸国のなかでも我が国の遠洋漁業にとって重要な漁場を有するミクロネシア連邦（以下「ミクロネシア」という。）及びパプアニューギニア独立国（以下「パプアニューギニア」という。）からの研修生を我が国に受け入れ、実施している。



研修開始式

この研修コースは、関係沿岸国からの漁船員養成のニーズに応え、漁船の乗組員（候補生）を我が国に受け入れ、沖合・遠洋漁業の振興に中心的な役割を担う部員クラスの育成をとおして、関係沿岸国のまき網漁業の自立・発展、雇用の創出及び我が国との協力関係の維持・発展に貢献することを目的としている。

ミクロネシアとパプアニューギニアの両国ともに、かつお・まぐろ漁業の開発・振興を国の重要な漁業政策の一つに掲げ、この開発・振興をとおして雇用機会の創出・拡大を目指しており、特に若年層の失業対策として力を入れている。

財団では、研修コースの実施により両国の漁業振興に資することを第一義として、良質な漁船乗組員が養成されることにより、漁業分野における就労機会の増大に繋がる効果を見込んでいる。また、研修を修了した両国の研修生は、将来的に我が国の漁船に就業の機会を得る可能性があり、乗組員不足に直面する我が国の海外まき網漁業の一助となることが期待されている。2024年度の乗船コースは、ミクロネシアより3名、パプアニューギニアより3名の計6名の研修生を受け入れた。

研修生の所属機関と申請団体である海まき協会との協議を経て、研修生は決定される。ミクロネシアの場合は、ミクロネシア連邦国家海洋資源管理局（National Oceanic Resource Management Authority：以下「NORMA」という。）、パプアニューギニアの場合は、パプアニューギニア水産公社が研修生の所属先である。2024年度は、海まき協会が財団の協力可能性調査のスキームを利用して2024年4月にミクロネシアのチュー

ク州を除くヤップ州、ポンペイ州、コスラエ州の3州に出向き、事前にNORMAが選抜した候補者に対し研修の概要説明を行った。質疑応答を通じて候補者のコミュニケーション能力、研修への意欲、人柄を把握することができ、適格者の選定を確実なものにすることができた。

乗船コースのニーズや期待される成果から、海まき協会からは若年層の候補生が申請される。2024年度は6名の参加者のうち、4名が20代、2名が30代と若々しい構成となった。

そのため、初めて海外渡航を経験する者も多い。中には、自分が生まれ育った地域から初めて離れる者もあり、2024年度も例外ではなかった。

研修カリキュラムは、主に船内で交わされる日本語の習得、海外まき網漁業及び乗船に係る一般知識の習得を目的とした一般研修と、実際に海外まき網漁船に乗船し、まき網漁業に従事する漁船員に求められる漁労技術の習得を目的とした技術研修の2本柱で構成されている。

(2) 一般研修

一般研修期間における研修の様子について紹介する。

研修生は研修開始式、研修ガイダンスを終えた後、約1か月間にわたり徹底した時間管理のもとで研修を受けた。

時間を守り、自分自身で行動を管理することは、この先のまき網漁船で最低限必要となる規律を守ることに繋がり、乗組員の一員として技術・知識を身に付け、チームワークを乱さず、安全操業を続けるために重要なモラルの一つといえる。

多くの日本人にとっては当たり前のことではあるが、両国からの研修生は、その国民性もあるのか細かな時間に縛られる生活に慣れていないことが多い。

そのため、研修の初期段階では、時間厳守の習慣を徹底させるため、日常生活においても規

則正しい生活を求め、各自の自制心を培うことに重点を置いた指導を行った。

一般研修では、まき網漁船の乗組員として求められる基礎知識の習得を行うが、日本語の講義にも多くの時間を割り当てた。

日本語を学ぶことは日常生活だけでなく、一般的な知識習得に必要な他、乗船研修時における技術・知識習得の一助となる。また、乗船中に発生しうる危険を回避し、安全な漁労活動を続ける上で必要不可欠である。

操業中は、船が不規則に振動するなか大型の重機を稼働させる。揚網には漁労ブームの先に取り付けられた巨大なパワーブロック（揚網機）を稼働させ、スケールの大きな漁網を絞り、船上に収めていく。最も重要な網裾の巻き締めにはパース（purse:巾着）ウインチを最速で稼働させる。一刻を争うような状況のなかでの研修となる。危険と隣り合わせであり、一步間違えれば命を落とすことさえある。研修生は他の乗組員と同じ乗船メンバーとしてチームワークでの作業に臨場し、指導を受ける。研修生といえども乗組員の一員として、危険を回避し、安全操業を続けるためには、最低限の日本語の習得が必要なのである。

これまでの研修生のなかには、片言の日本語を操る者もいたが、2024年度の研修生6名は、全員日本語に初めて接する者たちであった。限られた時間で日本語の基礎レベルを習得する必要があるため、日常生活や船上生活において使用頻度の高い、実践的な日本語の習得ができるような講義内容にしている。

研修生にとっては、初めて経験する体系的かつ短期集中型の語学研修であり、予習・復習などの学習習慣に戸惑う者も少なくない。大変苦勞している姿を目にすることも多いが、講師によるきめ細かな指導を受け、徐々にではあるが基礎的な会話能力が身についていく。その頃には仲間意識も芽生え、習得の早い者は、進度の遅い者へ教えたり、お互いに教え合ったりする

姿を目にするようになる。仲間同士の助け合い、チームワークの重要性を理解するきっかけとなっている。



日本語研修の様子

一般研修では、日本語研修の他、まき網漁船員として最低限必要な基礎的な技術（まき網漁船の特徴と操業概要、船内生活、船員心得、船体主要部名称、係船設備と係留索の種類、魚群形成、漁獲方法、投網・揚網・作業手順、製品管理の基礎知識、漁獲物の冷凍・保冷・作業手順、乗船時の一般的注意事項、操業時・退船時の注意事項と救命筏の取扱、安全標識、乗船準備の注意事項、漁獲物の流通、カツオ・マグロ資源管理）について、専門講師から幅広い知識、技術を習得できるよう趣向を凝らしている。

一般研修期間中に基本的なロープワーク、網修理の実践的な知識と技術の習得を目的としたシーマンシップ研修を実施している。実技講習として1日目は、一般的なロープワークについてクラブヒッチ（まき結び）、ポーライン・ノット（もやい結び）について説明し、アイスプライス（さつま編み）の加工実習を行った。

2日目は、引き続きアイスプライスとショートプライス（2本のロープ接続方法）の加工実習を行い、最終日の3日目は、漁網の修理及び仕立て（浮子網、沈子網と身網の固定他）の実習を行った。身体を動かすことをい

とわない研修生にとって、これらの実践的な研修は、机上での学習から抜け出せ喜んでいるように見えたが、ロープ、網地と格闘するその姿は真剣そのもので、シーマンとして貴重な経験を積めて満足しているようであった。



シーマンシップ研修（ロープ加工実習）

研修生6名は、プログラムの一環として2024年8月19日から8月21日までの3日間、焼津水産加工センター、水産加工会社の水産加工場（藤枝市）、焼津漁港他の水産関連施設を見学し、鈴廣かまぼこ博物館（小田原市）では、水産加工実習として揚げかまぼこの手づくり体験教室に参加することができた。その道中、久能山東照宮、日本平、小田原城の景勝地、史跡を訪ね、我が国の歴史、文化について造詣を深めることができた。

この地方視察では、研修生は、漁獲物がどのように加工され、各加工業者が自社製品の付加価値を高めるため、いかに弛まぬ努力を続け、消費者ニーズを敏感に取り入れながら製品化しているか、その流通段階において多くの関係者の手を経て製品化されており、その水産加工品が様々な味、かたちとなって家庭の食卓を賑わせているかを見ることで水産業界の全体像を知ることができ非常に有意義であったと思う。

（3）技術研修

技術研修では、一般研修で得た知識と技術をもとに実際にまき網漁船約2航海（90日間程

度)へ乗船し、研修を受ける。

一般研修期間中は、同じ目的を持った仲間と囲まれて研修を受けることで、母国にいる家族や友人への想いから生じる寂しさ、辛さを紛らわすこともできたが、技術研修に入ってから、研修生一人一人が別々のまき網漁船に乗船し、個別に研修を受けることになる。

漁船によっては、同胞が乗組員として乗船していることもあるが、ほとんどの場合は日本人乗組員に囲まれた中で研修を受けることになる。研修生には、一般研修以上に厳しい環境のなかで、研修をやり遂げる強い意志と自己管理能力が求められる。

技術研修の開始は、乗船予定のまき網漁船の航海スケジュールに合わせ、順次乗船を開始する。2024年度は、9月末に一般研修を終えたものの、入港のタイミングと合わず、やむを得ず2～3週間の待機を余儀なくされた研修生もいた。乗船まで間があいた研修生は、海まき協会のアレンジで福島県いわき市において追加のロープワーク講習を受講した。そこでは乗船を待ちながらロープワークの実技に更なる磨きをかけることができた。その後10月初旬にはすべての研修生が無事に乗船研修を開始することができた。

技術研修中はワイヤー作業、ロープ刺し他日課の漁具作成を行い、網揚げ作業(浮子並べ)他の漁労作業を通じて船員心得、船員規則の習得から、魚群探査の方法、漁獲方法、漁獲物の運搬手順、冷凍保存から鮮度管理といった漁獲物の管理に関する一連の作業の流れを学ぶ。その他にも漁労機械の保守を通じて船体構造や保守点検を学習する機会を設けている。船内清掃を通して船上生活における安全衛生の重要性を意識させ、体得できるように考えられている。航海士と一緒に航海当直に当たる日は、航海計器、航海日誌の記入方法、航海法規、航海機器の運用を学べるチャンスであり、日を重ねるにつれ知識が蓄積し、研修生の目の輝きから船上

生活に自信がついてきたことが見てとれる。

今年度の技術研修の終わりは、当初2025年1月中旬に設定していたが、漁模様や天候の影響で期間内の帰港が叶わず、数名の研修生が期間を延長して研修を継続することになった。

3. おわりに

全ての研修生は、最後までしっかりと研修をやり遂げ、目標を達成し、研修を終え帰国することができた。

自国においても本研修で習得したさまざまな技術、経験をいかして、進むべき針路を切り拓いていって欲しいと願っている。

末筆ながら、研修生の乗船を快く受け入れていただいた海外まき網船の各船主様、親身になってご指導いただいた講師の皆様、漁業者と財団との間を取りまとめていただいた一般社団法人海外まき網漁業協会の担当者様には特別に感謝申し上げます。

フィジー事務所着任のご挨拶

フィジー駐在員事務所 濱田 莉穂

1. はじめに

海外漁業協力財団フィジー駐在事務所（以下「フィジー事務所」という。）に所員として2024年4月1日付で着任を命じられた。

本稿では、フィジー事務所に着任してから10ヶ月近く過ごす中で感じた、フィジー共和国（以下「フィジー」という。）の魅力と課題、そして所員としての抱負について僣越ながら述べさせていたきたい。

2. フィジーの魅力と課題

フィジーと聞いて、読者の皆さんはどのようなイメージを抱くだろうか。筆者のイメージは青い空と美しい海、そして広大な自然であった。しかし、実際のところ、フィジー事務所がある首都スバは徒歩圏内でフィジーらしい青く澄んだ海を見ることができず、雨も多いところである。最初は少し残念に感じた部分もあった。それでも車で1～2時間移動すれば、リゾート地や美しい景色を楽しむことができ、南国フィジーの魅力に触れることができる。新型コロナウイルス感染症の影響により、一時は観光業も落ち込んでいたようであるが、現在はオーストラリア等から豪華客船でフィジーを訪れている人も多く見受けられ、賑やかな雰囲気となっている。

フィジーの人々の親しみやすさも大きな魅力だと思っている。「Bula!（こんにちは）」と頻繁に交わされる挨拶には、この地の人々のホスピタリティや温かさが表れていると感じる。買い物中に「それ、どこで買ったの?」とフィジー人から気軽に話しかけられることも度々あり、そのフレンドリーさには驚かされる。しか

し、そのフレンドリーさとは裏腹に、スリや酔っ払ったフィジー人同士の暴行事件も稀に発生しており、特に夜間の移動には注意している。

フィジーの仕事の進め方は非常にマイペースで、最初はその遅さに戸惑った。所謂「フィジータイム」と呼ばれるものである。もちろん「フィジータイム」があることはフィジー事務所で勤務経験のある歴代の先輩方から聞いていたので、ある程度想像はついていたものの、日本ではすぐに返信が返ってくる単純なメールも、フィジーでは数週間待たされることが本当に珍しくなく、着任当初はそのペースに驚き、戸惑うことも多々あった。今は先手を打って動くことを心掛け、さらにフィジー事務所事務補助員のRubyさんのサポートも得ながら、こまめに催促するなどフォローアップを徹底して進めるよう努めているので、少しずつ適応できるようになってきた。

そんなマイペースさとは裏腹に、車の運転のスピードは速い。車をゆっくり運転していると、後続車にクラクションを鳴らされることもしば



スバから2時間ほど離れたリゾート

しばで、何とも不思議なギャップが存在する。こうした二面性に対し、最初はカルチャーショックを受けたが、今はフィジー人という人間性に対し、興味深く感じるようになってきた。

3. 所員としての抱負

さて、本誌では何度も繰り返し説明されていることではあるが、フィジー事務所は、我が国の遠洋かつお・まぐろ漁船の最重要漁場である中西部太平洋において、我が国と入漁協定が締結されている島嶼国 9 개국ⁱに対し、FDAPINⁱⁱプロジェクトを実施することを目的として1990年に設置された。同プロジェクトは、水産関係施設の修理・修復を行うとともに、相手国の技術者（カウンターパート）に修理・修復及び維持管理の技術指導、沖合漁業活性化及び漁獲物の付加価値向上に係る助言等を行っている。

30年以上にわたり続けられてきたこのプロジェクトを、東京本部からではなく、現場に最も近いフィジーで支援する意義は非常に大きいと感じている。フィジーは太平洋島嶼国のハブ的な役割を担っており、事業対象国の大臣や局長がふらっとフィジー事務所を訪れることも多く、その距離の近さが強みとなっている。大臣や局長からの要望のすべてに対応することは難しいが、可能な範囲で協力できる方法を模索しながら、関係者との対話を重ねている。所員としては、まだ日々の事務作業に追われることも多いが、現場でカウンターパートと直接対話する際には、課題に真摯に耳を傾け、解決策を共に考える姿勢を大切に、また、所長や専門家、本部職員と連携しながらプロジェクトをより良い方向へ導くことを目指している。

そのためには、筆者自身の英語力をさらに向上させるとともに、現地の状況を的確に把握す

ることが不可欠であると思う。こうした自分自身の能力向上に努め、微力ながらプロジェクトのさらなる発展に貢献していきたいと考えている。



フィジー漁業大臣とのMOU署名式
左から、山田在フィジー日本国大使館一等書記官、カウンターパートのマニ氏、北澤フィジー駐在員事務所長、バイニバル水産林業省大臣、畑野専門家、筆者。

4. おわりに

着任から1年近くが経過し、日々の業務に追われつつも、少しずつであるが生活にも業務にも慣れてきたように感じる。これからもフィジーや太平洋島嶼国の環境や慣習に驚かされることもあるかもしれないが、帰任時にフィジー事務所での経験が実り多いものだったと実感できるよう、これからも一歩一歩努力を重ねていく所存だ。関係者の皆様のご指導とご協力に心から感謝し、今後とも変わらぬご支援を頂けるようお願い申し上げたい。



リゾート地でのイルカウォッチング

i キリバス、ソロモン、ツバル、ナウル、バプアニューギニア、パラオ、フィジー、マーシャル、ミクロネシア（国名は全て通称）。

ii Fisheries Development Assistance for Pacific Island Nations（地域巡回機能回復等推進事業）の略。

これまでの経歴とこれからの抱負

開発協力課 角谷 祐介

1. はじめに

私は2024年8月1日付で海外漁業協力財団（以下「財団」という。）に入団し、開発協力課に配属された。現在は、太平洋やアフリカ地域の技術協力プロジェクトに携わっている。本稿では、自己紹介を兼ねて、財団に採用されるまでの経歴と財団事業に携わる上での抱負について述べてみたい。

2. 経歴

(1) 富山に生まれ、富山で育つ

はじめに私の経歴について紹介したい。富山県に生まれ、海から程近い地域で育った私にとって、幼いころから「漁業」や「海」は割と身近な存在であった。幼少期は目立たない平凡な少年だった気はするが、高校進学あたりで少しずつ自分の人生に対して大胆な決断をするようになってきた。富山県では、高校進学での志望校選びは公立志向が強いが、私は周囲の流れに逆らい、これといった理由もなく私立専願で受験を突き進んだ。高校入学後は硬式テニスに打ち込み、朝の練習から放課後の部活、その後はテニススクールと社会人サークルをはしごするテニス漬けの毎日で、帰りはいつも22時を過ぎていた。

(2) 上京、大学進学

大学は県外に出て知見を広げてほしいという家族の勧めもあり、都内の大学を志望した。残念ながら志望校への挑戦は軒並み失敗に終わり、センター試験利用入試でなんとか滑り止まった母校に入学した。実際に大学へ赴き受験したわけでもなく、キャンパスの下見もしなかったの

で、入学オリエンテーションに向かう道中で迷い遅刻し、いきなり出鼻を挫かれた形となった。幸先悪いスタートであったが、入学して間もなくテニスと武道サークルを掛け持ち、アルバイトに加え、幼いころにテレビで見たキックボクシングに興味を持ち格闘技も始めることを決心しキックボクシングジムにも入門した。

(3) アメリカ・カリフォルニアでの留学

大学在学中に海外留学をすると心に決め、3年時に大学の提携校留学プログラムの合格を目指した。結果は合格で、イギリスにある大学へ1年間留学できる権利を手に入れた。しかし、当時アメリカのドラマに夢中になっていたこともあり、本当に留学したい国はイギリスではなくアメリカであった。また、希望していた授業料全額免除が叶わなかったこともあり、後悔しないように本当に留学したい国に行くためプログラムを辞退し、私費での語学留学に切り替えた。私費留学となるので予算の都合上、留学期間は当初予定の半分である半年とし、大学を4年間で卒業するため休学をせずに3年次の後期を海外留学に充てることとした。今思えば、非合理的で理解不能な思考である。だが、アメリカで過ごしたこの半年間で出会った人々や辛いことや素晴らしい経験により確実に私の価値観は変化し、アメリカ留学がなければ、今の私はいないと断言できる。

(4) カリフォルニアでの生活

このような経緯で、3年次の後期からカリフォルニア大学アーバイン校での語学プログラムに参加することとなった。ホームステイ先が

前述のドラマの舞台であるニューポートビーチであったことから、カリフォルニアの海のそばで生活しながら英語を勉強したいという願が叶った。そんな喜びも束の間、通学手段であったバスが難関であった。乗り換えがうまくいかない時は、車で20分程度の距離に2時間近く所要する日も珍しくなく、朝6時過ぎに家を出て、帰ってくるのが20時過ぎという毎日であった。この状況を打破するため、急いで現地で自動車運転免許を取得して中古車を購入し、車での通学に切り替えた。

日本ではペーパードライバーであったことが功を奏したのか、左ハンドルには抵抗なく馴染むことができたが、振り返ると当時は車運が無かったように思う。マイカー通学初日にいきなりレッカー移動の洗礼を受け、遠出をすればアリゾナの荒野でタイヤがパンク、極め付けは帰国数日前に交通事故に巻き込まれ廃車、最後に車を売却して帰国する計画は潰えた。

少々話が逸れたが、参加していた語学プログラムでは留学生クラスに所属していた。アメリカに渡り3ヶ月ほど経った頃、ネイティブとの交流がゼロである日常に焦りを覚えた。大学の語学プログラムでは1日中授業があるが、大学のすぐそばにある語学学校には授業が半日のプログラムが存在していることを知った。考えた結果、ネイティブと会話する時間を作り出すため、その語学学校に転校し、午前で終わるプログラムに申し込んだ。



憧れだったニューポートビーチ（筆者は左）

（5）格闘技を通じた交流

ホームステイ先の近くにあるキックボクシングができる格闘技ジムに入門し、午前に語学に集中した後、午後と夜は練習に打ち込んだ。幸い大学1年次からアマチュア選手として試合に出場していたこともあり、快く仲間に迎えてもらった。しかし、ネイティブのトレーナーや練習仲間たちとの会話は留学生たちとのそれとは比にならないほど難しく、また、トレーニング内容もかなりハードであったため、ジムでは基本的に極限状態での英語リスニングとなった。この甲斐あって、普段の会話は以前よりスムーズになり、言葉に対する反応速度や聞き取る力が確実に向上したと感じるようになった。

語学と格闘技中心の毎日を過ごし、時には仲間の試合のサポートのため、車で7時間かけてサンフランシスコへ遠征し、帰国間近に自分自身もアリゾナ州でプロルールの試合に出場した。この試合の数日後に日本で東日本大震災が起き、帰国間近であった私にチームメイトは「今はまだ帰らない方がいい、こっちにいなよ。」と言ってくれた。まるで家族のように親身に心配してくれ、とても嬉しかった。



アメリカでの試合（筆者は右側青いパンツ）

（6）帰国と就職活動

帰国してからは大学3年の後期の単位を取得するため、講義はぎっしりと詰まり忙しかった。卒業間近にキックボクシングでプロデビューする夢も叶えたが、デビュー戦を勝利で

飾れず、試合内容にプロとしての壁を感じ、そのまま選手としての活動を休止した。就職活動を行いつつ、まずは大学卒業することに集中し、卒業後は富山の実家に一度戻った。このころ、カリフォルニアの語学学校で韓国人の友人が多数できた影響で韓国に興味を持ち、アルバイトを掛け持ちながら毎日朝から晩まで働き、当時の円高を追い風に2ヶ月に1回程度のペースで訪韓した。海外、できれば韓国で働きたいと考え、資格勉強など努力はしたが、就職まではなかなかハードルが高く挫折した。富山に戻り1年程度経ったころ、少しずつ現実を見始め、本腰入れて第二新卒としての就職活動に取り組んだ。

(7) 大阪での社会人生活

社会人としてのスタートは「海運業界」で「船会社」から始まった。国際的なイメージに惹かれ、東京にある船会社の求人に応募したが、結果は不採用。しかし、面接を担当していた部長が私のアメリカ留学や格闘技の経験に興味を持ってくれたようで、「大阪支社で働かないか？」と提案してくれた。希望していた東京ではなかったが、その提案を受け入れ、大阪支社に配属されることになった。こうして社会人デビューを果たすこととなる。

海運業界について全くの無知であった私は、入社後まず船会社、商社をはじめとする荷主、そして通関業者や各港の港湾作業会社など、様々な立場が絡み合う海運業界の複雑な関係や自分の立場を理解することに非常に苦戦した。同じ取引先会社でも、部門によって顧客となったり、委託先となったりすることは珍しくなかった。状況に応じて立場が変化することが多々あり、柔軟な対応が求められた。業務としては主に在来船の集荷営業・運航を任された。大阪営業所は少人数であったため、メインの業務に加えてコンテナ船や貿易書類に関する業務にも携わることができたことは幸運であった。

一方で、規模の小さな営業所であったため、携われる業務の範囲は限られており、実際の実務の中心は東京本社に集約されていた。部署異動や転勤の前例や制度は一切存在しなかったが、私を採用してくれた部長の配慮により、より大規模な業務に携われる東京への異動を打診された。この提案を受け入れた結果、東京本社の在来船部門に配属されることとなった。

(8) 再び東京へ

東京に戻る直前、大阪で所属していたジムの会長による巧妙な策略に嵌り、プロデビューしてしまっていた私は、計らずしも現役プロキックボクサーとして東京に舞い戻った。そのまま都内の古巣のジムに戻り、本格的に会社員と格闘家の二足の草鞋生活が始まった。

キックボクシングはタイのムエタイにルーツを持つ、日本発祥の格闘技である。実は、ムエタイとキックボクシングでは細かいルールやファイトスタイルがやや異なる。私は階級の割には長身で、蹴りを中心としたファイトスタイルを得意としていたため、試合の採点基準において蹴りのポイントが高いムエタイに向いており、その分野でチャンピオンを目指して日々練習に取り組んだ。毎日終電近くまでの練習により体力が付き健康な身体を手に入れたことはもとより、仕事面でも好影響がでてきた。「プロのキックボクサー」というワードは同僚や取引先とのコミュニケーションの一助となり、二足の草鞋を履くことで格闘技をする自分、会社員としての自分にそれぞれ適度なプレッシャーがかかり、よいパフォーマンスを出すことができるようになり、充実した日々を送っていた。

(9) キャリア形成のための転職

留学時の仲間たちが大手商社やメーカーで、ジョブローテーションや海外赴任を経て着実にキャリアを積んでいることをSNSを通して目にすることがあった。同じ留学を経験している者

同士でも、自分自身は彼らと遠く及ばない地点にいるように思え、自身のキャリア形成について考えるようになった。

これからデジタル化がさらに進むだろう社会において、自分のITリテラシーの低さに焦りを覚え、思い切ってIT企業へと環境をかえた。転職先から派遣された共済組合では、マイナンバー関連の情報連携運用業務に携わった。ITの込み入った知識は特に求められなかったが、派遣先の共済組合の一職員として業務に携わるため、社会保障制度についての知識を詰め込んでいった。当時はコロナ禍が始まりデジタル化が大きく進んだ時期で、またマイナンバー制度の過渡期であった。保険証の紐付けエラーなどが多発する状況を改善するため、当時の上司とタグを組みエラーの解決に回った。派遣先である共済組合での勤務は任期があると理解していたものの、職場の雰囲気や業務は自分に合っていると感じていた。社会保障制度にも自然と興味を持ち、後付けながら「好きを仕事にできている」形となった。また、同時期に結婚し子供も授かり家庭を持ったことから、自分自身のライフプランに改めて真剣に向き合うこととなった。

(10) 憧れと現実

そんな中、ひょんなことから以前海運業界にいた際に憧れであった本邦船会社グループ企業の求人を目にした。その多様な航路や世界最大レベルのビジネス規模であり、業界をリードする存在として常に新しい挑戦を続けている点に強く惹かれていた。さらにリモートワークを積極的に取り入れており、場所を選ばない働き方も私にとって大きな魅力となり、まずは採用試験に応募することとした。採用面接で採用担当者と話しているうちに、当時の船会社時代の様々な思い出が蘇り、懐かしさとともにこの会社で頑張りたいという思いが湧いてきた。こうして縁あって採用され、再び海運業界に戻り自

動車船の運航に携わることとなった。運航業務という本船（船長）とやりとりする陸上の窓口となり、関係各所と連携しながら航海計画や港湾作業のスケジュール調整、燃料の手配を行なった。

一方で、24時間365日止まらない船を相手にするため、緊急のトラブル対応も多く、リモートワーク下での公私の境目は曖昧になっていった。また、担当したアフリカ航路では、日本での船積み時には確かに存在した自動車のサイドミラーやシフトノブがアフリカでの荷揚げ時には消失しているなどの珍事件は日常茶飯事、出港後に船内に潜伏している密航者を発見し下船させるため港へ舞い戻るなど、地域特有のトラブルも多かった。また、当時アフリカ向けの貨物の輸出は好調で、積載地の日本では需要に応じて主要顧客を中心として寄港数も多く、台風をはじめとする荒天によって予定が乱れた際には、船長には意向を、陸上駐在の技術職員とは安全を、営業担当とは様々な試算をした上で経済性を考慮した最善のプランを話し合い、現場である港と調整することが求められた。私は引きが強く担当船の台風遭遇率や、燃料まわりのトラブルが多かったように思う。

入社した年には、船の遅れにより、年末の寄港スケジュールの決定に関係各所と大いに揉めた。この緊張状態は年末休暇にまでもつれ込んだ。家族で出掛けている時も、正月帰省のための新幹線の車内でも、常に港の代理店と電話で交渉、というよりも口論に近いやりとりをしていた。ゆっくりした年末年始とは程遠い痺れる正月とはなったが、この一件で各港の代理店の担当の方々とは距離が縮まった。また、入社半年ほど経って主となる運航業務以外にも担当を持つことになり、私に割り当てられたのは「システム」というものであった。具体的には運航管理システムで発生するトラブルの解決であり、このシステムは貨物や運賃、燃料などの情報を

一括で管理する重要な役割を担っていた。ハードな役割とは聞いていたが、業務負担は運航業務以上であり、とりわけ月次期間と呼ばれる月初めの第1～5営業日までに、自分の担当航路分の採算確定業務を行う傍ら、運航部全体のシステムトラブルの発生状況を管理し、解決のサポートをしていた。ここでも狙い澄ましたかのように担当船の台風や荒天の対応に苦しめられた。一度業務を終了しても緊急事態が発生し、ジムや駅のホームでの対応を余儀なくされることもあり、深夜までの作業となることも少なくなかった。また、徐々にこれらのエラーが偶発的なものではなく、人為的な登録ミスによるものであることが浮き彫りになり、世界中の全運航担当者に「正しい登録」についての呼びかけが必要となった。まずはどうあることが正しいのかを把握した上で、マニュアルの改善等を通して呼びかけていった。少しずつ全体のエラー数が減っていくことに喜びを感じつつも「正しく伝える」ことの難しさや、自分の無力さを痛感する機会となった。

(11) 国内チャンピオン戴冠

キックボクシングの方は佳境を迎えており、遂に同階級のランカー4名での王座決定トーナメントが開かれることとなった。4名の内、下馬評でいえば私は一番優勝から遠かったのではないかと思う。しかしながらトーナメント1回戦でなんとかタイ人を退け、決勝戦であるタイトルマッチまで進むことができた。

試合は日曜日に行われることが多かったが、船のトラブルに平日・休日は関係なく、振り返ると試合会場で仕事の電話を受けることも少なくなかった。タイトルマッチ当日も例に漏れず控室で社用携帯に船や港湾会社からの着信があり、試合のコスチューム姿で落ち着きなく観客席をうろついていた。会場には会社から多くの同僚・上司たちが応援にきてくれており、業務のことで試合の準備に集中しきれない私の

様子を見て彼らは「とりあえず今は目の前の試合に集中して」と心強い言葉をかけてくれた。試合自体は幸い緻密に計画した作戦が奏功し、危なげなく判定勝ち、悲願のチャンピオン戴冠となった。前職のメンバーはもちろん、これまで所属した会社の取引先や上司なども来場しており、これまでお世話になった方々の前で晴れ姿を見せられたのは本当に嬉しかった。また、翌日はネットのライブ配信で観戦していた遠方の代理店の方々から祝福の電話やメールをいただき、これまで頑張ってきて本当によかったと思えた。



タイトル戴冠時にリングで娘と撮影

(12) 新たな挑戦

海運会社の業務は相変わらず忙しく混沌としていたが、部内に関連会社より出向してきた同僚が相棒のような存在となっていた。特にシステム関連の改善について協力して業務を進めながら日々やりがいを感じて過ごしていた。

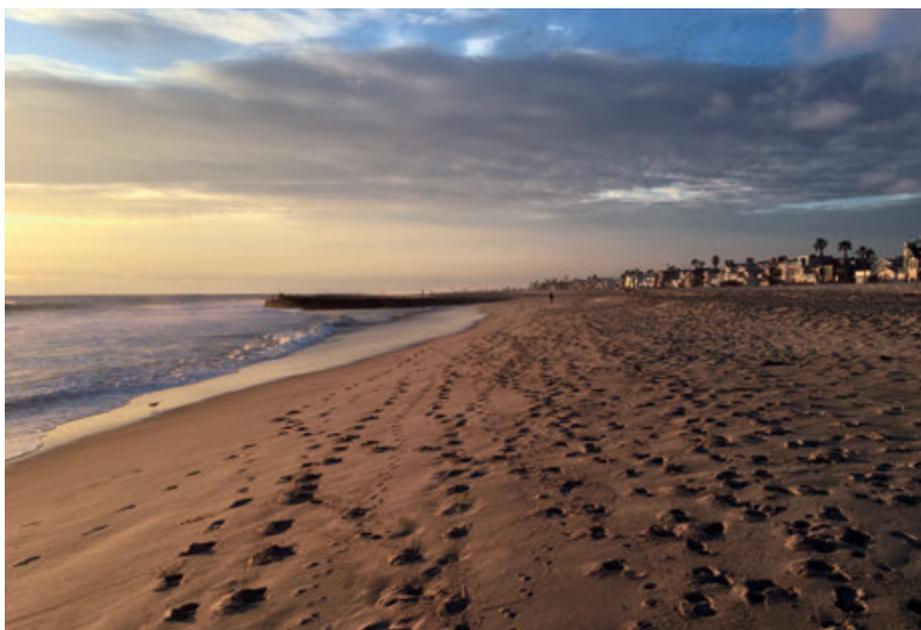
充実した毎日であったが、日々の業務の忙しさや時間外対応によりワークライフバランスは安定せず、その影響が家族に及んでいることは

明らかであった。また一つの業務ではなく、色々なことを経験したいと思う自分も相変わらず存在していた。30代も半ばに差し掛かり、まもなく次女も誕生しようかという状況で、転職という選択は今までのようにすぐに決断することが難しかった。一方で、会社自体も変革の時を迎えており、様々なアイデアを求めていた。それに乗じて、ジョブローテーション制度の導入を役員に直接提案した。役員との距離は近く、格闘技も毎試合観戦に来てくれる存在であり、親身に話は聞いてもらえたが、直近でそのような制度を取り入れる予定はないとのことであった。加えて、前述の相棒が出向元に戻ることも決まりコンビ解消となったため、定年を迎えるつもりであった海運会社を去ることを決断し、少しずつ転職活動を開始した。

そんな中、財団の求人に出会い応募、縁あって採用していただいた。キャリアの主軸が海運業界という国際業務であった私にとって、引き続き海外に触れる機会が多く、さらにジョブローテーションで様々な部署を経験できる財団はとても魅力的に映った。前職の所在地が財団から程近く、彼らとの交流も保ちながら働ける立地も魅力だった。

3. 今後の抱負

私にとって「海」は出身やこれまでの職務経歴から身近な存在ではあるが、「水産」については全くの素人である。入団して間もないが、実際に働く環境や職員の方々の人柄にはとても良い印象を持っており、これから学びながら成長していけることに期待している。幼い頃から遠回りしながらも走り続けてきた自分がいたからこそ今に辿り着いたと感じる。色々経験してきたが、環境が変われば「1」からのスタートであることは誰よりも分かっている。目の前の業務に一つ一つ真摯に取り組み、ミスをしたら反省し再発防止を心がけるという当たり前のことを意識しながら、周囲と協力しながら業務を遂行して行きたい。現在は技術協力プロジェクトを専門家と協力して立案・企画し、周りの方に助けてもらいながら進めている。いずれは自分が周りを助けられるように成長し、プロジェクトに関連する方々と信頼関係を構築し、ひいては日本の水産業発展の一助となるべく、1日でも早く自立した存在になっていきたい。また、自身の幅広い興味・関心を財団の活動にも活かし、事業に積極的に取り組むことで貢献していきたい。



ニューポートビーチの風景

彼の地のイッピン・スリランカ編

開発協力課 角谷 祐介

1. はじめに

海外漁業協力財団（以下「財団」という。）に入団して4か月が経過した2024年12月初旬、初の海外出張でスリランカ民主社会主義共和国（以下「スリランカ」という。）を訪れることとなった。2023年時点で人口は約2,100万人、面積は日本の6分の1ほどで北海道よりやや小さい規模の島国だ。首都はスリ・ジャヤワルダナプラ・コッテというユニークな名前だが、経済や観光の中心はかつての首都コロンボである。

今回の出張は、私が担当するIOTC（インド洋まぐろ類委員会）-OFCE Japanプロジェクトの一環として行われた。このプロジェクトは、IOTC加盟国によるまぐろ類の漁業統計の収集、管理、報告の能力を強化し、漁業統計と情報の精度を高めることを目的としている。今般、IOTC事務局による企画で、主に魚種判別をテーマにしたワークショップが2024年12月9日から13日までスリランカで開催されることとなった。また、各国のサンプラーが参加するこのワークショップで、魚種判別における彼らのニーズを把握し、現在財団が開発中の魚種判別WEB媒体を試行してもらい、フィードバックを得るため参加することとした。

初めての海外出張で、特に楽しみにしていたのが現地の食文化との出会いだ。出発前には、準備の一環として都内のスリランカ料理店で本格的なスリランカカレーを味わった。しかし、せっかくスリランカを訪れたのだから、有名なカレーだけにとどまらず、他の料理や食材にも目を向けた。

以下、このスリランカの出張で目に留まった食材や料理について紹介したい。

2. スリランカのイッピン

(1) アンブル (Ambul)

私は主食並みに果物をよく食べる。その中でもバナナは手ごろに栄養補給ができるスーパーフードであり、ほぼ毎日食べる。日本に流通するバナナはほとんどがフィリピン産で、スリランカのものは見たことがない。だからこそ、スリランカのバナナを試してみたいと思い、食べてみたので紹介したい。スリランカではバナナをざっと5種類ほど確認したが、その中でも特に美味しかったのが「アンブル」という小ぶりのバナナである。触感は少し粘りが強く、適度な酸味と甘みを兼ね備えていて、非常にバランスが取れた味わいであった。



アンブル

このバナナは1房にたくさん実がついていて、パクパク食べられる。しかし、長さが短いため、実も小さめという点が少し残念である。その欠点をカバーするのが次に紹介する「Red Banana」である。その名のとおり赤いバナナ

であるが、正式名称は分からない。触感はアンブルと似ており、粘りが強く、味も少し酸味が強いように感じたが、全体的にはバランスが良く、食べやすい一品である。



レッドバナナ

ちなみに下記の青いバナナはまた違った種類であったが、名前は忘れてしまった。さらに私が帰国するまでに熟してくれず、おいしく食べることができなかった。熟していないバナナを食べることが、そして皮を剥くことさえもここまで困難なことだとは知らなかった。苦勞の末にたどり着いたその実の味はとても渋く、触感ハセロリのようにシャキシャキとしていた。



未完熟バナナ

(2) キングココナッツ

露店に並ぶココナッツには、見慣れた緑色のものと、鮮やかなオレンジ色のものがあった。このオレンジ色のココナッツこそが「キングココナッツ」と呼ばれるもので、現地語では「タンビリ」と言うらしい。ココナッツといえばミネラルを豊富に含み、水分補給にぴったりのココナッツウォーター。日本でも市販のものをよく飲んでしたが、この「キングココナッツ」のウォーターも試さない手はない。注文すると、おばさんがなたでココナッツの上部を切り落として飲み口を作ってくれる。大き目のサイズを注文したこともあり、実の中の液量は700ml程度あった。

ココナッツウォーターを飲み終えた後は、実を割ってもらい、その中の果肉を食べる。実を割ってもらったときの殻の破片をスプーン代わりに使って掻き出して食べる感じだ。味はさっぱりとした甘さで、触感ハピューレのように滑らかだった。

なお、このキングココナッツはスリランカ原産の品種であり、他の地域ではほとんど見かけることがないようだ。我々に馴染みのある緑のココナッツと比べると、果肉の層が薄い。そのため、緑のココナッツはココナッツミルクを作るのに適しているのに対し、キングココナッツはもっぱら飲用に向いている。このキングココ



なたでココナッツの上部をカットし飲み口を作る。

ナッツは1個200スリランカルピー（日本円で約100円）で売られており、他に売られていた緑のココナッツよりやや高価であった。



ココナッツウォーターを飲み終えた後は殻を割り、中の果肉を食べる。

(3) ビリヤニとその他の惣菜

地理的にインドと近いスリランカでは、料理にもその影響が強く出ているようで、インド料理のビリヤニ（炊き込みご飯）をしばしば街でみかけた。ここでは、ワークショップが行われたスリランカ漁業資源研究開発庁（National Aquatic Resources Research and Development Agency: NARA）の職員食堂（Canteen）のメニューとしてあったビリヤニを取り上げたい。このcanteenでは、ディスプレイに並んだ欲しいメニューを店員に伝えて皿に盛りつけてもらう。なお、スリランカのビリヤニは、細長いバスマティライスではなく、主にスリランカで生産されているバスマティ種とサンバ種のハイブリッド品種であるキーリサンバライスで作られていた。白米もしくはターメリックライスのどちらかを選択した後、その他の惣菜を自由に選んでいく。ワークショップの参加者からのおすすめで下記の写真のとおり注文した。ビリヤニはバスマティライスで作られているイメージ

であったが、キーリサンバは小粒でバスマティのように細長くないものの、パラパラとした食感は共通していた。味自体はじわじわと辛く、食べ進めるごとに額に汗がにじみ、様々なスパイスが使用されていることが感じとれた。結果的にすべての料理の正体は分からなかったが、写真の左にみえる緑色の料理は「mukunuwenna（ムクヌウェナ）」という薬物野菜の炒めものだった。食してみると青臭さがあり、どこか春菊に似た風味であった。この野菜の名前と見た目にはどこか見覚えがあると思ったら、出張中宿泊していたホテルの朝食バイキングに毎日並んでいたものだった。



ディスプレイに並ぶ惣菜



ビリヤニとその他惣菜

(4) ムクヌウェンナ (mukunuwenna) スムージー

毎朝のホテルの朝食バイキングで必ず目にしたのが、このムクヌウェンナ (mukunuwenna) のスムージーだった。深い緑色のスムージーの底には小さく刻まれた米が沈み、見た目は健康的そのもの。すぐそばに黒糖の角砂糖があったことから、これを溶かしながら食べるのが一般的なスタイルであると思われる。



ムクヌウェンナスムージー

その味は一口飲んでみると、青臭さが口いっぱいに広がりその中に塩気が絡み合う、どうにも形容しがたい歯痒い味であった。さらにここに黒糖を加えることで甘さと塩気が混ざり合う。普段であれば頑張っって残さず食べるが、スリランカで連日暴食を続けていた私の胃袋はこの一杯すら受け入れる余裕を失っていた。

おそらく栄養価は高いと思われるが、ダメなものはどうやってもダメなのだ実感したスープだった。

(5) ジャフナピットゥ (Jaffna Pittu)

続いてスリランカ北部の料理について紹介したいが、ここでスリランカの公用語について触れておきたい。スリランカの公用語は、シンハラ語とタミル語の2つである。ただし、シンハラ語話者が人口の70%を占める多数派であり、タミル語話者は少数派にとどまる。この2つの言語を話す人々の間では、互いの言語を理解で

きないケースが多いのが現状だ。このタミル語話者はスリランカ北部地域に多く、北部最大の都市ジャフナ (Jaffna) もその一つである。この地域には独特な食文化があり、その中でも「ピットゥ (Pittu)」は特に知られている。

ピットゥは米粉とココナッツを主な材料として筒で蒸された料理である。主にカレーやスパイスを効かせた副菜と一緒に食べられる。今回訪れたレストランでもチキンカレーや、ココナッツの果肉とサンバルソースを混ぜ合わせたココナッツサンバルと一緒に皿に盛られて提供された。さらにカレースープのようなものもセットで提供され、またラサム (Rasam) という酸味と辛味が特徴的なスリランカ版トムヤムクンのようなものも別途オーダーしていたため副菜には一切困らなかった。



ジャフナピットゥ (Jaffna Pittu)
手前側筒状の白っぽいものが、ピットゥ。



ラサム (Rasam)

(6) LION LAGER

スリランカを訪れる直前、これまで挑戦したことがなかった一人飲みデビューを日本で果たし、ビールをはじめとするアルコールがより好きになった。スリランカでもご当地ビールを試してみたいという思いを抱いていた中、手軽に見つけられたのが、スリランカを代表するビールブランド「LION」だった。このビールは、すっきりした飲み口に爽やかさがあがりながら、ほどよいコクを持つのが特徴であった。定番の「LION LAGER」だけでなく、濃厚なスタウトやアルコール度数が高い「STRONG」いった種類も存在する。ちなみに「STRONG」はアルコール度数が8.8%と、通常のラガーではあまりない高さを誇る。ラガーというとアルコール度数は低めなイメージであるが、このビールは確かにラガーらしい味わいを持ちながらも、文字どおり強さを感じさせる仕上がりだった。これについて調べたところ、ラガーでも度数を高める製造方法が存在するらしい。その一例として、麦芽由来の糖分を多く含むように原料を調整する方法があるという。この「STRONG」は高アルコールながらも飲みやすく、ラガーの枠を超えた楽しさを味わえる一本だった。



LION LAGER

3. おわりに

スリランカ初訪問は、未知の文化や食生活を知るだけでなく、自分の視野を広げる貴重な体験となった。特に印象的だったのは、現地出会った果物の豊かさとその美味しさだ。バナナやココナッツといった果物は、日本では目にするものの少ない種類が多く、それぞれに独特の味わいや食べ方があった。

その中でも私にとっての「イッピン」はというと、キングココナッツだ。ココナッツウォーターで喉を潤した後、その果肉まで楽しめる点が魅力的であり、さらにスリランカ原産の品種であることにも惹かれる。現地では緑のココナッツより高価ではあるものの、手の届く価格で味わえるのも嬉しい。一方で、新しい料理に挑戦しながらも、味覚の慣れや個々の好みによって限界を感じた経験もあった。ムクヌウェンナスムージーのような一品は、その栄養価を認めつつも、自身の味覚では完全には受け入れられなかった。このような体験は、食事を通して異文化に触れるという意味では非常に重要だったと考える。

総じて、今回の出張は業務的な目的だけでなく、食文化を通じてスリランカの魅力を存分に体験でき、非常に充実したものになった。



LION STRONG

主な動き

対象期間 2025年1月～3月

要人往来

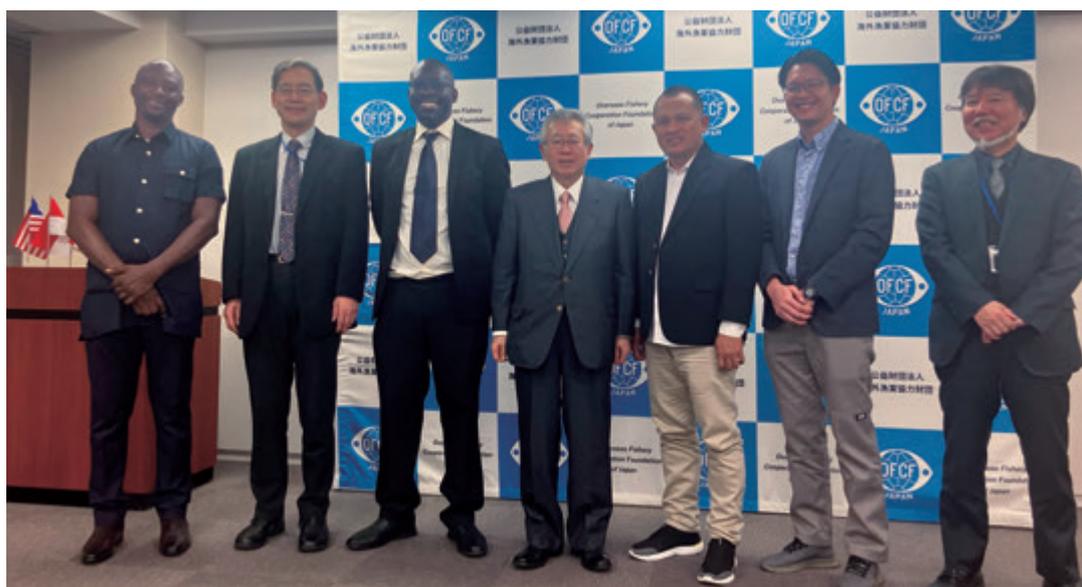
2025年2月18日 夕食会 モーリタニア・イスラム共和国
漁業海運港湾施設省 計画協力研究局長 Dr. Mohamed Ely BARHAM
水産職業訓練センター センター長 Mr. Mohamed Malainine HAYE



左から、須田主任、首藤常務理事、ハイエ センター長、バルハム局長、太田専務理事、安久事業部長

研修生受入

2025年1月14日 研修開始式 水産指導者養成（資源管理）コース資源管理グループ 計5名
アルジェリア民主人民共和国(DZA) 1名、インドネシア共和国(IDN) 1名、
ケニア共和国(KEN) 1名、タイ王国(THA) 1名、リベリア共和国(LBR) 1名



左から、Mr. Roosevelt Sansun DANIELS(LBR)、太田専務理事、Mr. Zachary OGARI(KEN)、
白須理事長、Dr. Tegoeh NOEGROHO(IDN)、Mr. Weerapol THITIPONGTRAKUL(THA)、
首藤常務理事、Ms. Amira TAMOURT(DZA) は、飛行機遅延のため欠席。

2024年12月13日～2025年2月18日 研修修了式

ミクロネシア連邦 (FSM) 3名、パプアニューギニア独立国 (PNG) 3名



2024年12月13日
Mr. Toety LIKIE(FSM)
乗船期間：2024年10月6日～11月6日
2024年11月13日～12月10日



2024年12月24日
Mr. Hope RAFFILPIY(FSM)
乗船期間：2024年10月7日～11月7日
2024年11月21日～12月20日



2025年1月7日
Mr. Berom Mario BAGAT(PNG)
乗船期間：2024年10月8日～11月15日
2024年11月28日～2025年1月2日



2025年1月7日
Mr. Michael Junior GARUWEMAI(FSM)
乗船期間：2024年9月12日～11月10日
2024年11月20日～12月31日



2025年2月3日
Mr. Rai OVO(PNG)
乗船期間：2024年10月29日～12月1日
2024年12月28日～2025年1月29日



2025年2月18日
Mr. Israel BOIRE(PNG)
乗船期間：2024年9月16日～11月18日
2024年12月2日～2025年2月12日

2025年2月21日 研修修了式 水産指導者養成（資源管理）コース資源管理グループ 計5名
アルジェリア民主人民共和国(DZA) 1名、インドネシア共和国(IDN) 1名、
ケニア共和国(KEN) 1名、タイ王国(THA) 1名、リベリア共和国(LBR) 1名



左から、首藤常務理事、Mr. Roosevelt Sansun DANIELS(LBR)、Mr. Zachary OGARI(KEN)、
Ms. Amira TAMOURT(DZA)、太田専務理事、Dr. Tegoeh NOEGROHO(IDN)、
Mr. Weerapol THITIPONGTRAKUL(THA)



研修生代表挨拶をするMr. Roosevelt Sansun DANIELS

主な動き

専門家派遣（短期派遣・対象期間：2025年1月～3月）

（1）水産関連施設機能回復推進事業

ア．地域巡回・拠点機能回復等推進事業（太平洋地域）

国名	目的	氏名	期間	主な派遣先
キリバス	巡回指導	阿部 稔 坂本 浩司 藤井 資己	2月1日～3月5日 2月15日～2月27日 2月5日～3月1日	トラワ、クリスマス、 タビノース
ツバル	巡回指導	久慈 広信 高橋 啓三	2月1日～2月22日 2月12日～3月1日	フナフチ
ナウル	巡回指導	畑野 実	1月25日～2月13日	ヤレン
パプアニューギニア	巡回指導	左近允哲郎	1月20日～1月31日	ポートモレスビー、 マヌス、ポボンデッタ
パラオ	巡回指導	畑野 実 坂本 浩司	1月6日～1月24日 2月14日～3月13日 2月28日～3月8日	コロール
マーシャル	巡回指導	久慈 広信 阿部 稔 坂本 浩司	1月8日～1月31日 1月10日～2月1日 1月12日～2月14日	マジュロ、イバイ
ミクロネシア	巡回指導	坂本 慎司	1月11日～1月18日 1月27日～2月8日 2月17日～2月22日	ヤップ、コスラエ、 ボンベイ

イ．地域巡回・拠点機能回復等推進事業（アフリカ地域）

国名	目的	氏名	期間	主な派遣先
マダガスカル	事業実施	近澤 良宇 吉岡 正次 村上 正治	1月16日～3月21日 1月23日～3月10日 1月27日～3月20日	アンタナナリボ、 トアマシナ

（2）水産技術普及推進事業

国名	目的	氏名	期間	主な派遣先
ソロモン	第3回派遣 第4回派遣 第2回派遣	真崎 邦彦 谷田 巖	12月18日～1月8日 2月19日～3月8日 2月12日～3月5日	ホニアラ、 ブエナビスタ
パプアニューギニア	第3回派遣 (沿岸漁業振興)	藤井 資己	1月6日～1月24日	ポートモレスビー、 ラエ、ウエワク、アロタウ
パプアニューギニア	第3回派遣 (水産物有効利用)	新井 孝彦 野村 明	2月6日～2月18日	ポートモレスビー、 マヌス
パラオ	第2回派遣 (シャコガイ養殖振興 フォローアップ)	中村 良太	2月9日～2月15日	コロール

(3) カーボンニュートラル技術等支援事業

国名	目的	氏名	期間	主な派遣先
ミクロネシア	事業実施	坂本 慎司	1月19日～1月26日 2月9日～2月16日 2月23日～3月8日	チューク

(4) 持続的海洋水産資源利用体制確立事業

国名	目的	氏名	期間	主な派遣先
カーボベルデ	第3回事業実施	新井 孝彦	1月9日～1月27日	ブライア、ミンデロ
サントメ・プリンシペ	第3回事業実施	川口 実	2月16日～3月9日	サントメ
ツバル	第4回事業実施	上杉 悟郎	2月4日～2月27日	フナフチ
ナウル	第4回事業実施	高山 琢馬	2月6日～2月28日	ヤレン

専門家派遣（長期派遣・2025年3月31日現在）

地域	国名（機関）	担当業務	氏名
太平洋	キリバス	持続的利用の助言	大橋 智志
	ソロモン	持続的利用の助言	小松 徹
	ソロモン（FFA）	まぐろ産業振興の助言	二階 尚基
	ツバル	持続的利用の助言	上杉 悟郎 （フィジー駐在）
	ナウル	持続的利用の助言	高山 琢馬 （フィジー駐在）
	パプアニューギニア	持続的利用の助言	五十嵐 誠
	パラオ	持続的利用の助言	與世田 兼三
	フィジー	巡回普及指導	畑野 実
	マーシャル	持続的利用の助言	野原 稔和 （3月8日帰任）
	ミクロネシア		出張所所長・巡回普及指導
巡回普及指導			小西 憲治 （3月24日帰任）
アフリカ	モザンビーク	持続的利用の助言	鷹尾 保馬
	モロッコ（ATLAFCO）	持続的利用の助言	石川 淳司
	モーリタニア	持続的利用の助言	古井丸 拓也

政府ベースの漁業協力等

対象期間 2024年12月～2025年2月

無償資金協力

国名	案件名	交換公文締結日
バヌアツ	経済社会開発計画	12月4日
カンボジア	経済社会開発計画	12月10日
フィリピン	バンサモロ・ムスリム・ミンダナオ自治地域における持続可能な水産業バリューチェーン構築計画（FAO連携）	2月4日

外務省のホームページに「国別約束情報」が掲載されています。
URLは <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/data/zyoukyou.html> です。

Web会議及び打合せ（調査団の派遣）

国名	事業名	所属	氏名	期間
セネガル	水産物持続的利用推進支援事業	OAFIC（株） 大日本土木株式会社	中村 正典 中根 透 芦屋幸二郎 Moctar Sarr	1月28日～ 2月12日
コモロ	水産物持続的利用推進支援事業	水産エンジニアリング（株） 大日本土木株式会社	内田 昭 安井 京子 宮口 龍二	2月14日～ 2月24日

漁業交渉・国際会議（プレスリリース）

発表日	タイトル
12月20日	日口漁業委員会第41回会議（日口地先沖合漁業交渉）

詳細は農林水産省のホームページをご参照ください。
「会議等の開催情報」 <https://www.maff.go.jp/j/pr/event/kaigi.release.html>
「報道発表資料」 <https://www.jfa.maff.go.jp/j/press/index.html>

編集後記

発行人

今号P.33に「彼の地のイッピン（スリランカ）」が掲載されているが、筆者はスリランカに一度だけ行ったことがある。インド洋まぐろ類委員会（IOTC）の第8回遵守委員会及び第15回年次会合に出席するため、出発は成田空港から2011年3月13日、すなわち東日本大震災の2日後であった。国内がこんな状況で国際会議に出ていいのか、そもそも飛行機は飛ぶのかとも考えたが、日本が不在の時に我が国漁業にとって変なことを決められても困るので、13日の朝、ダメもとで成田空港に向かった。

成田空港には電車で行ったが、特に大きな混乱もなく空港に到着したと思う。しかしながら、フライトの方は言うまでもなく遅延が生じており、空港のロビーでは不安そうな外国人があちこちでたむろして、自分のフライトが飛ぶのを待っていた。時折、余震でターミナルが大きく揺れ、そのたびにあちこちから悲鳴が聞こえていたのを覚えている。

スリランカにはタイ航空のバンコク経由のフライトで行くことになっていた。成田発バンコク行きのフライトは数時間遅れで出発したため、バンコクでスリランカ行きのフライトに乗り継げなかったが、タイ航空が別の便を用意してくれていて、それもビジネスクラスであった。

スリランカに着いたのは深夜であった。当時、スリランカは、1983年から続いた内戦が2009年に終わったばかりであり、治安に少し懸念があったが街中はいたって平穏であった。しかしながら、至る所に自動小銃を抱えた兵士が立っており、内戦の名残が感じられた。

遵守委員会の会合に行くと、多数の出席者が我々を見て驚き、「よく来れましたね。日本は大丈夫ですか?」といった声をかけられた。会議は古いホテルの会議室で行われたのだが、会議室の床が板張り、後ろを人が歩くたびに床が縦に振動した。それが地震の縦揺れとそっくりだったので、そのたびに体が緊張したのを覚えている。

会議では色々なことが話し合われたが、14年近くが経過して殆ど覚えていなかったもので、IOTCのホームページに掲載されている第15回年次会合の議事録を読むと、日本から提案した漁獲証明制度が否決されていた。他方、EUが提出したヨゴレ（胸鰭の先端が白いサメ）及びシュモクザメ類の船上保持禁止提案とオーストラリアが提出したはえ縄の針本にワイヤーを使用することを禁止する提案についても否決されていた。記憶をたどると、確かサメに関するこれらの提案については日本が先頭にたって反対したため採択されず、無理を押し出席してよかったと思ったことを思い出した。

さて、スリランカ滞在中に毎日食事をしていたはずなのだが、何を食べたか全く覚えていない。筆者は辛い物が全くダメなので辛くなさそうなものを選んで食べていたはずで、逆に辛い物を食べていたら覚えていただろう。余談ではあるが、この前、家の近くにある辛さを選べるインド料理屋に行ってカレーを食べた際に甘口を頼んだら、本当に甘いカレー（辛くないという意味の甘口ではなくて砂糖を入れたように甘い）が出てきてびっくりした。

他方、スリランカで飲んだビールは明確に覚えていて、今号の「彼の地のイッピン」にもあったLionビールのスタウトが気に入って毎日飲んでた。Lionビールは、日本でも少し高級なスーパーに行くと見つけることができるのだが、このLionビールを見るたびにスリランカで飲んだことを思い出すのである。

◎貸付制度について

財団は、我が国漁業者等が海外の地域で、沿岸漁業等の開発振興、国際的な資源管理の推進、現地合弁法人の設立等の海外漁業協力事業を行う場合、これらの漁業者等に対してその事業に必要な資金について融資を行っています。貸付対象、資金の種類等は次のとおりです。

1. 貸付対象となる事業

実施する海外漁業協力事業が次に該当することが必要です。

- (1) 我が国海外漁場の確保との関連において行われるものであること
- (2) 我が国への水産物の安定供給との関連において行われるものであること
- (3) 政府の支持のもとに行われるものであること
- (4) 関係水産団体の支持態勢がととのっていること

2. 貸付対象者

本邦法人、本邦人、本邦法人等の出資に係る現地法人、国際機関

3. 資金の種類等

- (1) 低利融資Ⅰ類 [利率 年0.5%以内、償還期限 30年以内 (うち据置期間5年以内)]
 - ① 海外の地域の沿岸漁業開発及び国際的な資源管理の推進等に寄与するための協力事業で、
 - (ア) 海外の地域の政府、現地法人等に施設等を譲渡するために必要な資金
 - (イ) 海外の地域で行う事業に必要な資金で、相手国政府、現地法人等に貸付けるために必要な資金
 - (ウ) 海外の地域で行う開発可能性調査その他の技術協力に必要な資金
 - (エ) 入漁との関連で相手国に支払う漁業協力金等

- (2) 現地法人の設立等海外投資により行う事業で、その効果が主として周辺の住民生活向上に寄与すると認められる事業に必要な資金等

- (2) 低利融資Ⅱ類 [利率は市場実勢に応じて、円貨の場合は年0.6%以上、外貨(米ドル)の場合は年1.0%以上、償還期限20年以内(うち据置期間5年以内)]

海外の地域において現地法人等の設立等海外投資により行う協力事業で、

- ① 現地法人等に出資し、又はその株式を取得するために必要な資金
- ② 本邦法人等の出資に係る現地法人等に貸付けるために必要な資金で、設備資金その他長期資金に充てられるもの
- ③ 本邦法人等の出資に係る現地法人等に出資しようとする海外の地域の政府、現地法人等に対して、これに要する資金を貸付け又は施設等を譲渡するために必要な資金等

4. 融資割合

原則として海外漁業協力事業の実施のために必要な資金の70%相当額

5. 担保・保証

ご相談のうえ決定します。

公益財団法人海外漁業協力財団 融資部 融資課
電話：03-6895-5382 Fax：03-6895-5388

海外漁業協力 第110号

発行人 太田 慎吾
編集人 市野 孝典
発行所 公益財団法人海外漁業協力財団
〒105-0001
東京都港区虎ノ門3丁目2番2号
虎ノ門30森ビル

(TEL) 総務部 (03) 6895-5381
融資部 (03) 6895-5382
事業部 (03) 6895-5383

(FAX) (03) 6895-5388

(URL) <https://www.ofcf.or.jp/>

印刷所 野崎印刷紙器株式会社

©OFCF 本誌掲載記事の無断転載を禁ず

付近略図



刊行：2025年3月

裏表紙の写真：奄美大島の郷土料理である鶏飯（けいはん）。

ご飯の上に鶏肉・錦糸卵・しいたけ・パパイヤの味噌漬け・オレンジの皮のみじん切りをのせ、鶏がらスープをかけて食べる。



海外漁業協力 第110号 2025年3月刊行



*Overseas Fishery Cooperation Foundation
of Japan*

<https://www.ofcf.or.jp/>